山形県埋蔵文化財センター調査報告書第28集

亀ケ崎城跡

第3次発掘調査報告書

1995

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

亀ケ崎城跡

第3次発掘調査報告書

平成7年3月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

亀ケ崎城本丸、二の丸部分（空中写真）

調査区全景（南方上空より）

54

51

56

55

出土磁器　54　51
　　56　55

46

50

47

30

出土磁器　46　50
　　47　30

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、亀ケ崎城跡第３次の調査結果をまとめたものです。

亀ケ崎城跡は山形県の北西部に位置する酒田市にあります。酒田市は庄内地方の中核都市、とりわけ日本海に面する港町として、環日本海交易とともに発展してきました。

調査では、本丸と二の丸の間を隔てる内堀の一部が発見され、貞享年中亀ケ崎城絵図に基づいて発掘現場の位置が特定できました。堀の内及び付近からは主に日本海での船による交易によってもたらされたと思われる多量の陶磁器が出土しており、江戸時代の生活文化を色濃く反映させています。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な遺産と言えます。私たちは国民的財産の文化財を大切に保護し、さらに郷土の中で培われた文化を後世に引き継がねばなりません。一方、平和で豊かなくらしは私たちが等しく切望しているところです。近年高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県などの事業が増加していますが、これに伴い事業区内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。

事業区内の遺跡の調査は、埋蔵文化財と開発事業実施のため、適切かつ迅速に行われることが今日求められています。こうした要請に適切に対処するとともに埋蔵文化財調査体制の充実を図ることが急務とされ、平成５年４月に財団法人山形県埋蔵文化財センターが設立されました。職員一同、県民と関係各位の要望に答え本県の埋蔵文化財保護のため一層の努力をいたす所存です。今後とも当センターの発足の目的が遂行されるようご支援ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

本書が文化財保護活動の啓蒙普及、学術研究、教育活動などにおいて皆様のご理解の一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成７年３月

財団法人山形県埋蔵文化財センター

理事長　　木　場　清　耕

例　言

1　本書は山形県立高等学校校舎等整備事業に係わる「亀ケ崎城跡第３次」発掘調査報告書である。

2　調査は山形県教育庁文化財課の調査を経て、教育庁総務課の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3　調査要項は下記の通りである。

遺跡名　　亀ケ崎城跡（ＡＳＴＫ－３）　　遺跡番号　2071

所在地　　山形県酒田市亀ケ崎１－３－60

調査期間　　発掘調査　平成６年４月１日～平成７年３月31日

現地調査　平成６年６月21日～平成６年８月12日

調査主体　　財団法人山形県埋蔵文化財センター

発掘調査・資料整理担当者

調査研究課長　　佐々木洋治

主任調査研究員　　佐藤　庄一

調査研究員　　小関　真司

調査研究員　　山口　博之

4　発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県教育庁総務課、山形県土木部建築課、庄内支庁建設部建築課、山形県立酒田東高等学校、酒田市教育委員会、庄内教育事務所等関係機関の協力を得た。船越行雄氏には所蔵の絵図を快く見せていただき、様々なご教示を頂いた。ここに記して感謝申し上げる。

5　本書の作成・執筆は、小関真司が担当した。編集は尾形與典、須賀井新人が担当し、全体については佐々木洋治が監修した。

6　遺構平面図については、株式会社シン技術コンサルに実測業務を委託した。また出土した動植物遺存体と種実については株式会社パレオ・ラボに自然科学分析を委託して報告を受けた。

7　出土遺物・調査記録類は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は以下の通りである。

ＳＤ……溝跡　　ＳＫ……土壙　　ＲＰ……完形・一括陶磁器、土器

ＲＭ……金属製品　　ＲＱ……石製品　　ＲＷ……木製品

2　遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3　報告書執筆の基準は下記の通りである。

(1)　調査区概要図・遺構配置図中の方位は磁北を示している。

(2)　グリッドの南北軸は、Ｎ－38°－Ｅを測る。

(3)　遺構実測図は1/40、1/80、1/100、遺物実測図、拓影図は1/2、1/4、1/8縮図で採録し、各挿図ごとにスケールを付けた。実測図内のスクリーントーンは木材および石を表している。

(4)　本文中の遺物番号は、遺物実測図、遺物観察表、遺物図版とも共通にした。

(5)　遺物観察表中（　）内数値は、図上復元による推計値、また残存値を示している。また出土地点欄の層位は遺跡を覆う土層（基本層序）を表している。

(6)　遺構覆土及び一部遺物の色調の記載については、1993年度版農林水産省水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」によった。

(7)　遺物観察及び測定にあたっては、東京都新宿区細工町遺跡報告書凡例基準などを参考とした。

目　次

Ⅰ　調査の経緯
　1　調査に至る経緯……1
　2　調査の経過……2
Ⅱ　遺跡の立地と環境
　1　地理的環境……3
　2　歴史的環境……3
Ⅲ　検出された遺構
　1　遺構の分布……5
　2　ＳＤ１堀跡……5
　3　その他の遺構……6
Ⅳ　出土した遺物
　1　遺物の分布……9
　2　陶器……9
　3　磁器……9
　4　土器、土製品……10
　5　金属製品……10
　6　石製品……10
　7　木製品……10
　8　その他の遺物……10
Ⅴ　調査のまとめ……17
報告書抄録……18

挿　図

第１図　遺跡位置図……１
第２図　調査概要図……２
第３図　遺跡の層序……５
第４図　堀跡（ＳＤ１）断面図……５
第５図　貞享年中亀ケ崎城図……６
第６図　遺構配置図……７
第７図　出土古銭拓影図……７
第８図　中央トレンチ断面層序……７
第９図　ＳＫ４土壙……７
第10図　出土遺物実測図　陶器……11
第11図　出土遺物実測図　磁器……12
第12図　出土遺物実測図　磁器、金属製品、土製品、石製品……13
第13図　出土遺物実測図　石製品、木製品……14

付　表

表１　亀ケ崎城の変遷……４
表２　亀ケ崎城城代存任一覧表……４
表３　出土遺物観察表(1)……15
表４　出土遺物観察表(2)……16

図　版

巻頭図版１　亀ケ崎城本丸、二の丸部分　調査区全景
巻頭図版２　出土磁器
図版１　堀の根がため杭列　堀の断面層序
図版２　中央トレンチ断面層序　堀の根がため杭としがらみ　木の根と木舞
旧制酒田中学校校舎土台　調査作業状況
図版３　ＳＫ４土壙　西側壁材と柱材　ＲＰ16土人形出土状況
ＲＰ11皿出土状況　ＲＭ12槍身出土状況　ＲＭ６－１～10古銭出土状況
ＲＷ36木椀出土状況　現地調査説明会状況
図版４　陶器
図版５　陶器　磁器
図版６　磁器　土器　土製品
図版７　金属製品　土器　土製品　石製品
図版８　木製品

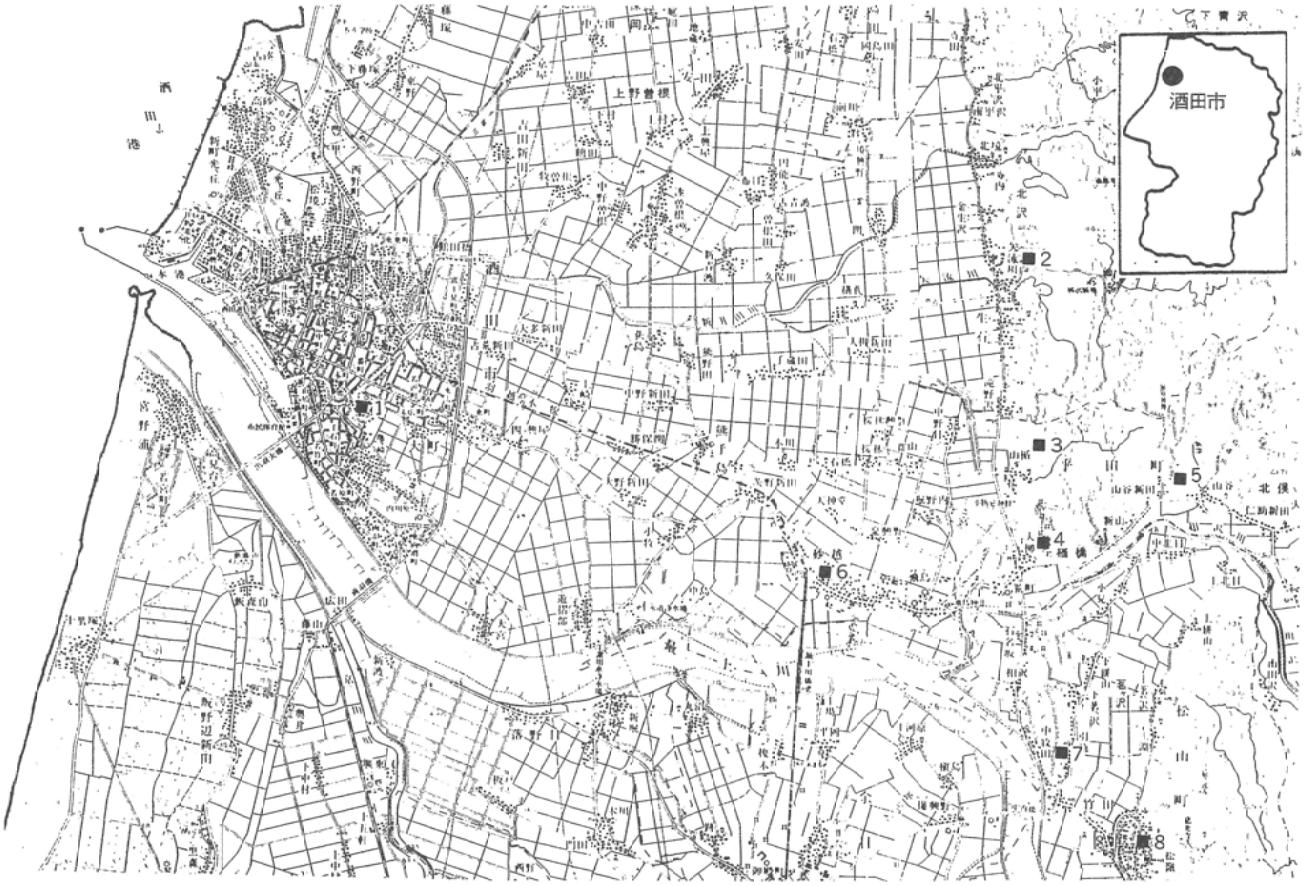
1　調査の経緯

1　調査に至る経緯

日本海に面する海上交易の要衝として古くから栄えてきた酒田のまち。その中核として南北朝期より亀ケ崎城（東禅寺城）が築かれていた。幾多の戦禍や時代の激動を体験してきた城域は明治維新後酒田県庁、旧制酒田中学校さらに県立酒田東高等学校の敷地となって、現在に至っている。

昭和63年酒田東高の校舎等整備事業に伴う分布調査が行われ、明治期と江戸期の少なくとも２時期の文化層が確認された。その結果に基づいて行われた平成２年度の第１次発掘調査（特別教室棟建設）では、江戸時代の陶磁器等の生活用具が数多く発掘された。平成５年度には第２次調査（体育館建設）が行われ、貞享年間の絵図に残る城代家老の屋敷と考えられる地点から陶磁器、土人形等が数多く出土し、その当時の上級武士の生活の様子が垣間見られた。また肥前産の陶磁器の多さは、日本海を通じての交易の活発さ、豊かさを感じさせた。

平成６年度は実習室棟の整備が計画され、山形県教育庁文化財課は山形県教育庁総務課と協議の結果、建設予定地点について第３次緊急発掘調査を行うことで合意した。酒田東高、県土木部建築課、庄内支庁建設部建築課とも事前打ち合わせ会等で調整をはかり、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を行った。



1　亀ケ崎城跡　　2　朝日山城跡　　3　山楯楯跡　　4　樽橋館跡
5　河内城跡　　6　砂越城跡　　7　田尻館跡　　8　松山城跡

第１図　遺跡位置図（Ｓ＝１：100,000）
国土地理病発行5万分の1地図「酒田」縮小

2　調査の経過

第３次発掘調査の現地調査は平成６年６月21日から平成６年８月12日まで、延べ38日間行われた。第１次、第２次調査の調査区設定基準を踏襲し、2m×2m単位のグリッドを校舎建設予定地に設定した。以下に調査の経過を略述する。

６月21日　機材搬入。調査安全祈願。調査区環境整備。事前に表土除去（50cm）を行った部分が湧水で水没しておりポンプによる排水作業にかかる。トレンチを入れ層を調べる。

６月23日　重機導入。水が引かず面整理が進まない。排水溝を周りに掘る。

７月４日　第１文化層（旧制酒田中学校校舎）検出、精査。

７月12日　第２文化層検出。江戸末か明治初期の埋め立て跡か。南東側に遺物集中地点発見。本丸、二の丸間の内堀と判断。掘り下げを決定。同時に西側より槍身、木材など出土。

７月25日　埋め立てられたと思われる多量の木部材が出土。第３文化層。調査期間を考慮し西半分と堀跡に調査を集中させる。西端より壁材出土。

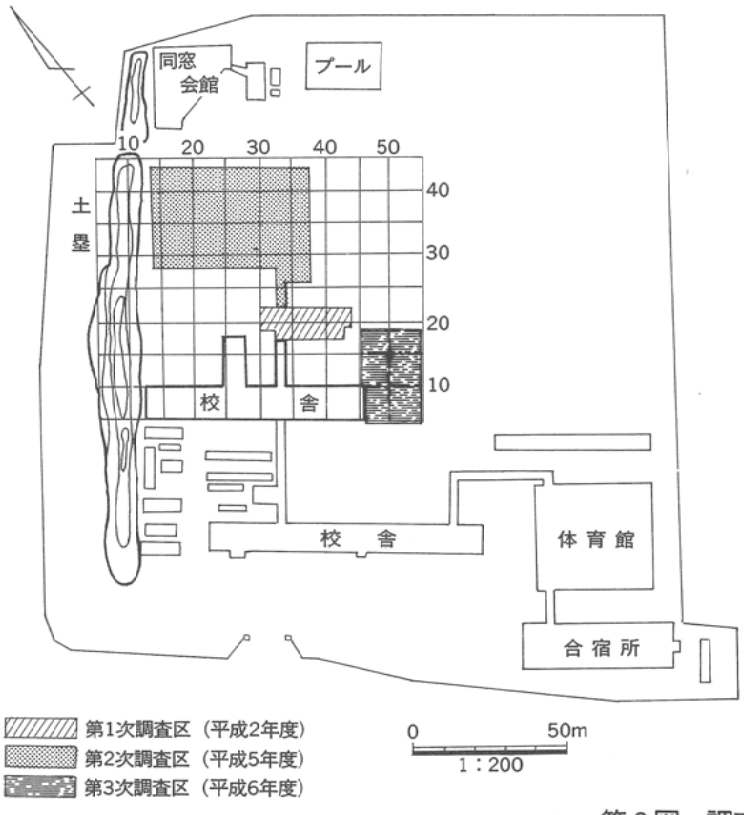
７月27日　西側に根木確認。江戸時代の第４文化層を考え面整理。下駄等多数出土。

７月29日　堀法面内より根固め杭列、しがらみ出土。中央部に東西トレンチ掘削。

８月４日　調査区遺構空中撮影。現地説明会準備。西側第５文化層。

８月５日　調査成果を公表する現地調査説明会を開催。（参加者約70名）。引き渡しのための現地確認も同時に行う。（県教育庁総務課、庄内支庁建設部建築課、酒田東高立会）

８月12日　現地調査終了　撤収



第２図　調査概要図（Ｓ＝１：200）

II　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

山形県の日本海沿岸には米所庄内平野が広がっている。酒田市は鶴岡市とともに庄内地方の中核都市の位置を占めているが、とりわけ日本海に面する港町として、海上交易とともに発展してきた。気候的には日本海の影響を受けており、山形県内としては寒暖の差が小さく積雪も少ないが強風の吹く日が多い。

吾妻山系を源とし山形県内を流れ下ってきた最上川は、中小河川を集めながら庄内地方に広大な沖積平野を形成し、酒田市市街地の南部で日本海に注ぐ。一方出羽山地より発した新井田川は、最上川と河口近くで合流し三角州を形成している。この三角州状の自然堤防上の微高地に亀ケ崎城は立地し、標高はおよそ3mを測る。城域は新井田川をはさんで左岸が本丸と二の丸、右岸が三の丸と配されており、水城的性格の強い堅固な平城である。

現在本丸と二の丸を含む地域は大部分が県立酒田東高等学校の敷地となっているが、一部は宅地になっている。現在も酒田東高敷地西側には南北170mに渡って土塁が現存しており、年輪を重ねた欅の大木が数多くそびえている。この土塁の中央部付近には、貞享絵図に書かれている物見台の張り出しが残っている。また酒田東高前や酒田商高付近の道路等に、城の縄張りが感じられる。

2　歴史的環境

酒田は室町時代以前は坂田村と呼ばれていた。酒田市街地北東部には、平安時代の出羽の国の国府と推定されている国指定遺跡「城輪柵跡」が存在しており、古くからの中央との交流をうかがわせる。舟運によって内陸と結ばれている最上川の河口に開け、巨大な穀倉地帯庄内平野を背後に抱えた港町酒田は、常に様々な勢力の攻防の場となってきた。

この地にいつごろ城が築城されたかについては諸説があるが、かつて四ツ興野にあった東禅寺城を文明10年（1478）遊佐太郎繁元が、地勢を利用し現在地に築城したといわれている。関ケ原の戦いの際上杉方の立てこもるこの城を、最上の大軍が容易に落とせなかったという逸話が、その堅固さを物語っている。堀と土塁で囲まれた総曲輪のこの城は、その形から巴城とも呼ばれていた。

湊町である酒田は最上川左岸の向酒田の時代から、酒田三十六人衆による町政が行われており、右岸の当酒田移転の後も問屋や商人たちが活躍し、自治機能が続いていた。しかし上杉、最上と続く戦国大名の支配権力の強化の中で、その機能は統制の中に取り込まれていった。そして元和８年（1662）三河以来の徳川の重臣酒井忠勝庄内入部の頃には、幕藩体制の支配行政機構の一部と化していた。出羽庄内藩の始まりである。

酒井家は鶴ケ岡城を本城とし亀ケ崎城は支城として城代を置いた。初代の城代は藩主の叔父松平甚三郎である。城代及び行政の責任者の町奉行が中心となって治安維持のみならず酒田湊の権益保護と統制にも権限を持っていた。三十六人衆もその一翼を担う形で存続していた。城そのものの規模は縮小され、城下町分と湊町分の境界は取り払われていった。

表1　亀ケ崎城の変遷

不　　祥		今の酒田市四ツ興野付近に大浄山東禅寺と称する真言宗の寺が建つ。一勢力圏を形成し、東禅寺城または酒田城と呼ばれる。長は東禅寺氏または酒田氏。
1466	文正1	遊佐大楯城主遊佐氏が、東禅寺氏を攻める。遊佐太郎繁元、東禅寺城主となる。前後にして東禅寺城、大洪水に押し流される。
1467	文正2	応仁の乱始まる。(～1477)
1478	文明10	繁元、東禅寺城を現在地（酒東敷地）に移築したとされる。
1512	永正9	東禅寺合戦。大宝寺武藤氏と砂越氏が東禅寺城で戦い、武藤氏敗れる。
1538	天文7	武藤晴時、東禅寺城と砂越氏を攻め川北を治める。東禅寺氏滅び、武藤氏一門を以て継ぐ。
1582	天正10	本能寺の変。国内再び無統制。
1583	天正11	武藤老臣前森蔵人、最上義光と通じ尾浦城を攻め、武藤氏自刃する。前森蔵人、東禅寺城主筑前守を名乗ったとされる。
1584	天正12	義氏の弟武藤義興、上杉景勝と結び庄内統制に努める。 上杉・武藤氏と最上・東禅寺氏の庄内争奪の様相強まる。
1587	天正15	東禅寺筑前守が反乱。尾浦城落城、武藤義興自刃する。
1588	天正16	最上義光と伊達政宗の対立深刻化。上杉方の本庄繁長、庄内に進攻。十五里ケ原の合戦。東禅寺筑前守討死。繁長、東禅寺に入城。武藤義興の跡目で繁長の二男、武藤義勝、出羽国主となる。庄内は実質、上杉支配下となる。
1590	天正18	秀吉の命で上杉景勝、出羽国内の検地を開始。
1591	天正19	秀吉、本庄繁長・武藤義勝の所領没収、上杉に与える。東禅寺城代に河村彦左衛門。
1591 ｜ 1596	天正19 慶長1	城主甘粕備後守、大町溝を掘る。
1599	慶長4	志田修理亮義秀、東禅寺城主となる。川村兵蔵、平城としての東禅寺城を整備する。
1600	慶長5	関ケ原の戦。関ケ原出羽合戦も始まる。
1601	慶長6	最上義光、上杉配下の東禅寺城を攻め庄内を制する。亀ケ崎城主3万石に志村伊豆守。
1603	慶長8	徳川家康征夷将軍となる。義光、東禅寺城を亀ケ崎城、大宝寺城を鶴ケ岡城に改称。
1611	慶長11	亀ケ崎城主志村伊豆守没する。九郎兵衛光惟跡を継ぐ。
1614	慶長19	最上義光没する。九郎兵衛光惟、鶴ケ岡城方に惨殺される。
1615	元和1	徳川秀忠一国一城の制を定める。庄内では、鶴ケ岡城と亀ケ崎城の二城が特に許される。
1622	元和8	最上氏改易される。酒井忠勝、庄内に入部。(14万石)。鶴ケ岡城を本城、亀ケ崎城を支城とする。亀ケ崎城代に忠勝の叔父松平甚三郎が当たる。町奉行1名物頭2名平氏20名。このころから、亀ケ崎城三の丸は、侍屋敷が取り壊され、町割に組み込まれる。
1627	寛永4	6月21日亀ケ崎城にて出火。城内を全焼する。
1672	寛文12	前年の東廻り航路開発に続き、最上幕領米が西廻り航路で初出船する。
1684～1684		(貞享年中図)
1713	正徳3	『編年私記』に、この年、酒田城代屋敷建つの記録がある。
1804	文化1	6月4日大地震発生。亀ケ崎城大破、大手橋折れる。城代宅等全半壊家屋一千軒を越す。
1868	明治1	戊辰戦争。(～1869)。庄内藩主酒井忠篤開城降伏。酒田に軍務官出張所、民政局を設置。
1871	明治4	廃藩置県。酒田は大泉県を経て酒田県となる。旧亀ケ崎城内に県庁を置く。
1875	明治8	県令三島通庸「鳴鶴学校」開校。11月に亀ケ崎城跡に移る。
1880	明治13	城内建物を民間に払い下げる。その後建物を取り壊し畑地とする。
1920	大正9	県立酒田中学校敷地となる。(現在の県立酒田東高等学校)

表2　亀ケ崎城代在任一覧表

城代氏名	在任期間
松平甚三郎	元和8　1622 寛永6　1629
白井惣右ェ門	寛永6　1629 寛永8　1631
松平甚三郎	寛永8　1631 承応1　1652
松平九郎兵衛	承応1　1652 万治1　1658
松平藤兵衛	寛文10　1670 元禄16　1703
松平甚三郎	享保17　1723 元文4　1739
酒井図書	寛延1　1748 宝暦1　1751
松平甚三郎	宝暦1　1751 宝暦8　1758
酒井図書	宝暦13　1763 安永6　1777
竹内五兵衛	安永10　1781 寛政7　1795
酒井内匠	寛政7　1795 寛政11　1799
酒井吉之允	亨和2　1802 文化7　1810
酒井弾正	文化8　1811 文化10　1813
里美外記	文化10　1813 文化13　1816
松平武右ェ門	文化13　1816 天保5　1834
杉山弓之助	天保12　1841 天保14　1843
松平甚三郎	弘化2　1845 弘化3　1846
酒井奥之助	弘化3　1846 弘化4　1847
服部瀬兵衛	嘉永2　1849 嘉永5　1852
松平舎人	嘉永6　1853 安政6　1859
酒井奥之助	安政6　1859 安政7　1860
加藤宅馬	安政7　1860 慶応4　1868
朝岡助九郎	慶応4　1868 明治2　1869

資料　酒田市史改訂版上巻より

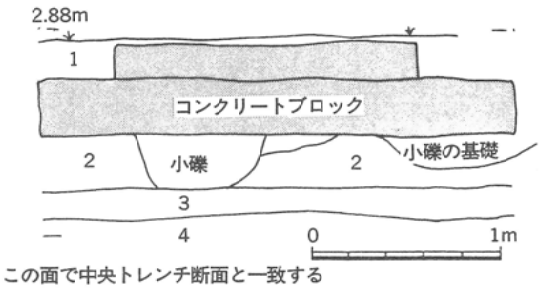
III　検出された遺構

1　遺構の分布

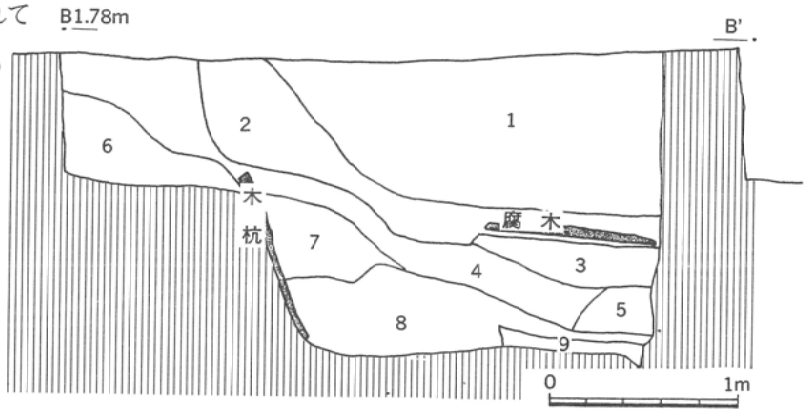
腐敗臭の強い表土を剝ぐと、大きなコンクリートブロックとすぐ下に丸石を使った基礎の列が表れた。戦時中軍需工場となった際据え付けられた旋盤とのことであり、基礎は旧制酒田中学校校舎のものと考えられる。(ここまでⅠ層)旧制酒田中学校校舎の桟瓦が多数出土した。(第3図・図版2)以下地表面より150cmまでII層。150cm付近より遺物が集中する堀跡が検出。(III層)同じ層位よりＳＫ4検出。やや下から埋め立てに使われたと思われる柱材出土。160cm～190cm（IV層）木の根出土し文化層確認。木舞等ＳＫ4より出土。以下地表面より235cm（Ⅴ層)、250cm（VI層)、290cm（VII層）となる。常に地下水の湧出があり土は常に多量の水分を含む状況であったが、堀跡に近いところは固く締まっていた。地表面より300cm近くなると堀の底付近より鉄分を多量に含んだ赤茶色の水が湧出し、メタンガスのような臭いが感じられた。

2　ＳＤ1堀跡（第4、6図・図版1）

調査区の南東部、53～54－6～16グリッドIII層より検出され始めた溝跡である。陶磁器等の遺物が調査区東側に集中し、南北に帯状に広がることが確認された。絵図記載の間数等から本丸と二の丸を隔てる内堀であることが考えられた。精査していくと法面に沿って生えていた植物が青く残っている面が現れ、おそらく明治期に一気に堀を埋め立てた名残と考えられた。堀の構築状況を調べるため法面にトレンチを入れたところ、根固め杭が出土した。調査した部分からの総計は54本となった。杭は径18cm～8cmで六角、四角等の面取り材が多いが皮付き材も見られる。鋭く削られた先端部等には腐敗防止のための人工的な焦がし跡も見られた。杭を精査していくと杭から法面に向かって葦を束ねて作ったと思われるしがらみが残っているところがあった。杭の周りの土を固定するためのものと考えられる。杭列の根元付近より珠洲焼片が出土しており、堀の造成は16世紀以降と考えられる。検出した堀跡はグリッドに対して（すなわち現在の校舎に対して)やや斜めに延びている。貞享絵図はまっすぐに書かれているが、現存する絵図の中にやや斜めに堀が描かれているものがあり、堀の位置について新たな発見と考えられる。



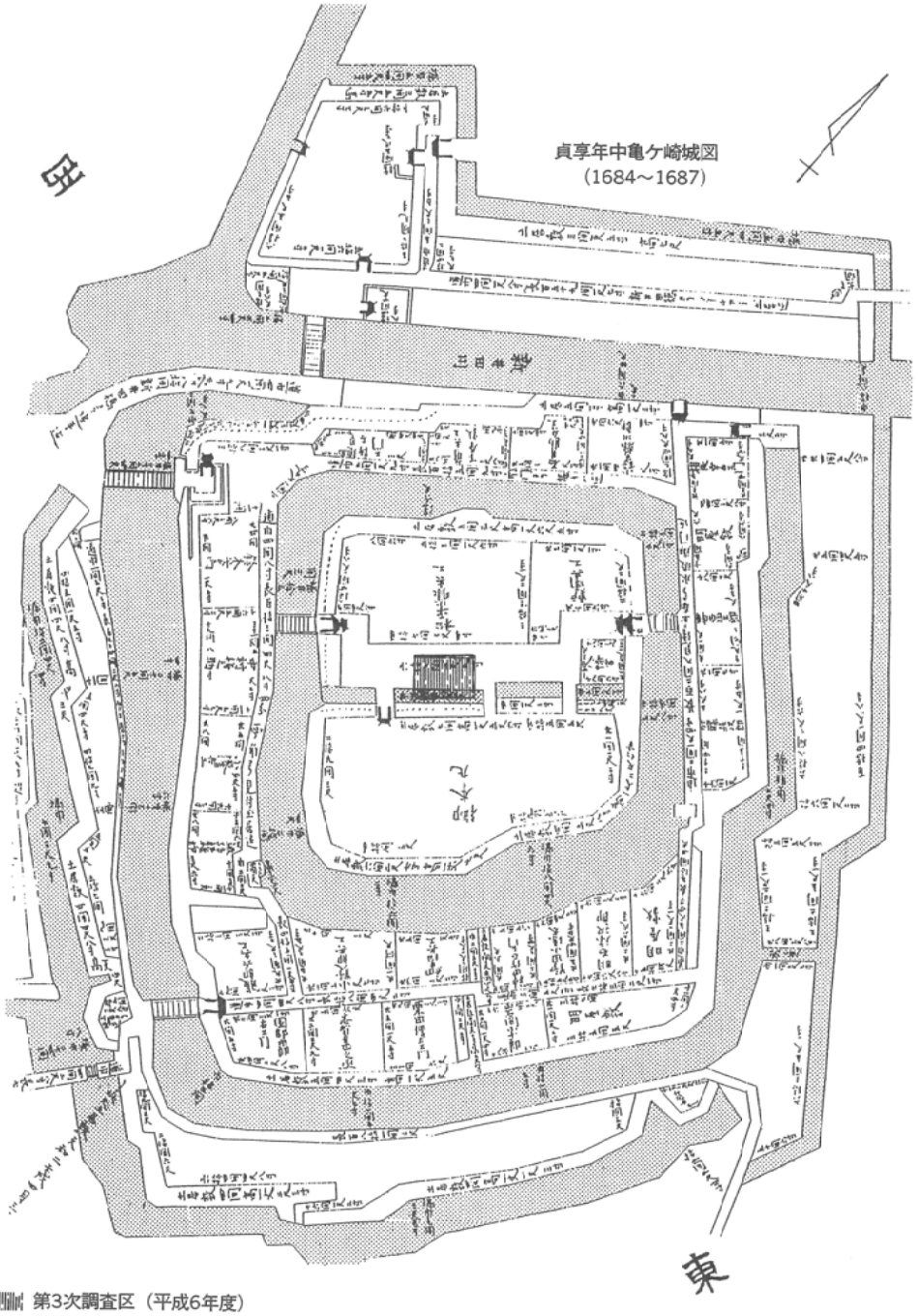
第3図　遺跡の層序　（S＝1：40)



第4図　堀跡断面図（S＝1：40)

層序註記
1 褐色土砂利層　礫混じり
2 黒赤褐色土　埋め土　ガラス片などが混じる
3 黄赤褐色土　明治以降の整地層か
4 堀の埋め土の始まり

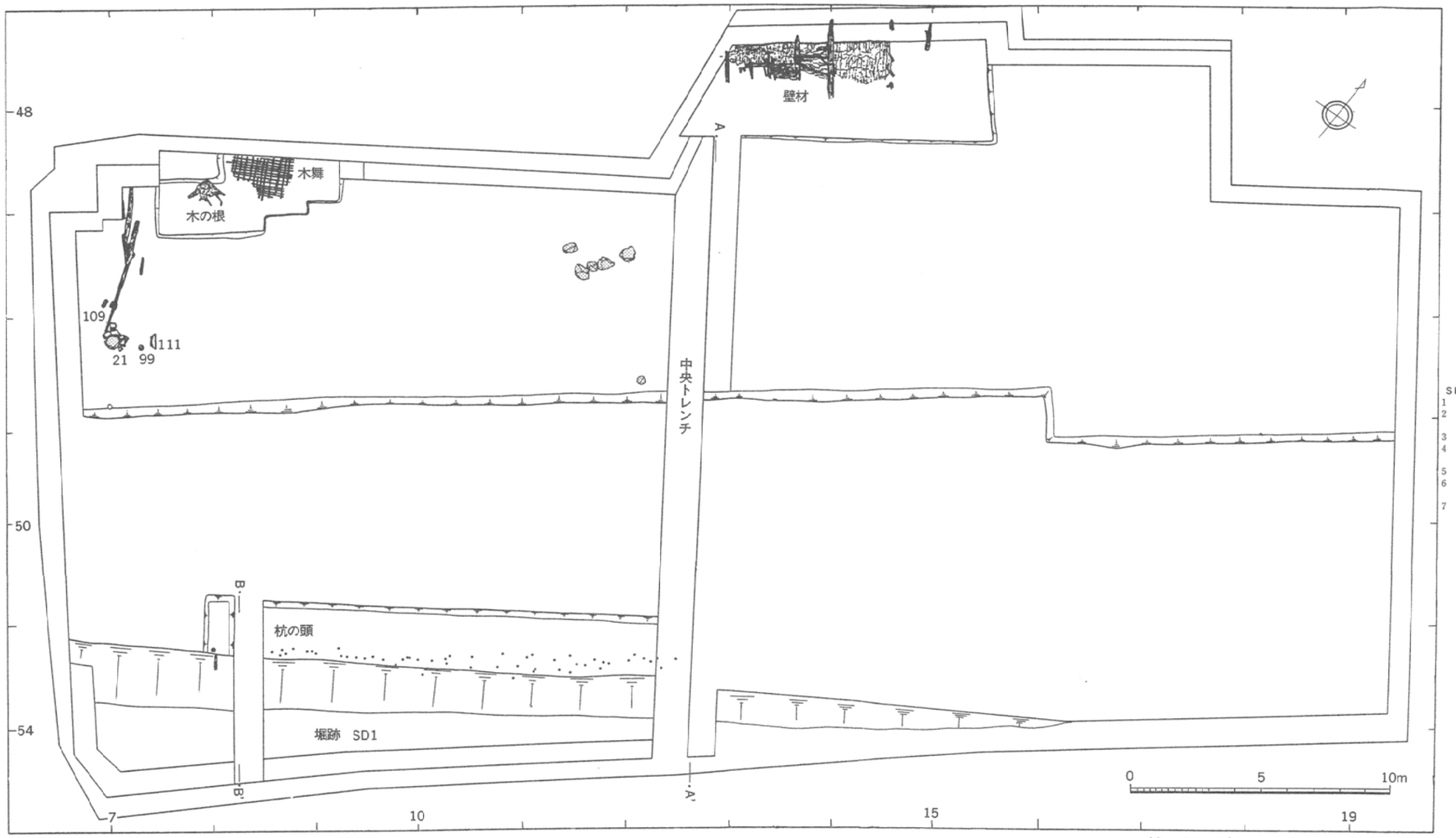
堀跡断面層序註記
1 7.5Y3/1 オリーブ黒シルト　礫、炭化物、遺物を多量に含む
2 5　Y2/2 オリーブ黒粘質土　礫、有機物を少量含む
3 5　Y3/1 オリーブ黒粘質土　腐葉土、木片を多量に含む
4 5　Y3/1 黒砂質土
5 10 Y2/1 黒粘質土　粘り強い　有機物を多量に含む
6 2.5Y3/1 黒褐色粘質土　有機物を少量含む
7 10YR3/1 黒褐色シルト　木片、木の根を多量に、礫、粘土を少量含む
8 5　Y3/1 オリーブ黒粘質土　有機物、木片、腐葉土を含む粘土を多量に含む
9 5　Y2/1 黒シルト　有機物



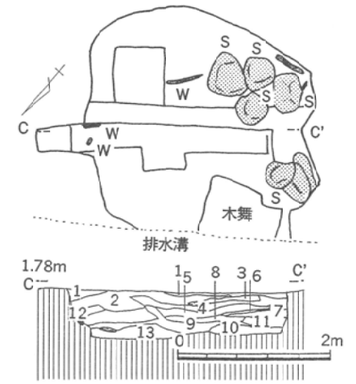
第５図　貞享年中亀ケ崎城図

3　その他の遺構

ＳＫ４は48～49―10グリッドIII層から検出され始めた土壙である(第９図)。ごみ穴的で多数の木材片、瓜、桜の種、径30cm程の丸石７個などが出土した。排水溝側（IV層）からは木舞がはっきりした形で検出され、壁が埋められた跡と考えられる。47～48―13～15グリッドIII層からも明らかに倒して埋められた壁跡と思われる杭が見え始めＶ層まで続いていた。(第６図)IV層目では杭の間に壁跡の藁が続いている部分が検出された。49～50―18～16グリッドIV層には埋め立てに使われたとみられる柱材が人為的に組まれた状態で出土した。（図版３）



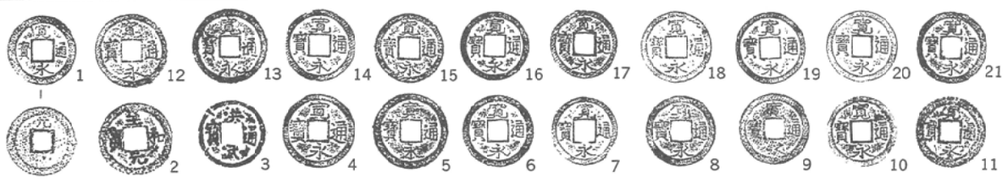
第6図　遺構配置図（S＝1：100）



第9図　ＳＫ４土壙（Ｓ＝１：80）

ＳＫ４断面註記
1　2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト　砂混じり
2　2.5Y2/1 黒色粘質シルト　砂、木質をやや含む
3　10 Y3/1 黒褐色砂質シルト
4　5　Y3/1 オリーブ黒粘質シルト　砂混じり
5　5　Y2/1 黒色砂質シルト
6　10 Y2/1 黒色シルト　有機植物の種等多量に含む。
7　5　Y2/2 オリーブ黒砂質シルト　有機物少量含む。
8　7.5Y2/2 オリーブ黒粘土有機物多量に含む。
9　5　Y2/1 オリーブ黒シルト　木質を多量に含む。
10　7.5Y2/1 黒色粘質シルト有機物少量含む。
11　5　Y2/1 黒色シルト　木質を多量に含む。
12　5　Y2/2 オリーブ黒粘質シルト　木質を含む。
13　5　Y2/1 黒色粘土

中央トレンチ土層断面註記
1　2.5Y3/2 黒褐色シルト　酸化物を多量に含む。
2　2.5Y4/1 黄灰色シルト　1より有機物、酸化物を多く含む。
3　2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト　有機物を多く含み、酸化物は1より少ない。
4　5　Y3/2 オリーブ黒砂質シルト　炭多い。酸化物1と同じくらい。
4-1　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　酸化物を微量含む。
5　2.5Y3/1 黒褐色シルト　酸化物を含む。
6　5　Y2/1 黒シルト　酸化物、有機物を少量含む。
7　2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト　炭化物、酸化物、有機物を含む。
8　2.5Y2/1 黒シルト　酸化物、有機物（葦、木片、種等）を含む。
9　10YR3/1 黒褐色粘質土　木の枝、炭化物を多量に含む。
8-1　2.5Y2/1 黒シルト　8より粘土ブロックが多く混じる。(4-1か)
10　10 Y4/1 灰色粘質土　炭化物を微量含む。
10-1　鳥色のしまがはいる。
10-2　鳥味が強い。
10-3　10-1に近い砂が多く混じる。
10-4　10-1に比べて暗みが強い。土器を含む。
10-4①～②　境界面があり。
11　5　Y3/1 オリーブ黒粘質土　炭化物（焼けた小枝など）を多量に含む。
12　5　Y4/1 灰色粘質土　炭化物を数量含む。
13　2.5Y2/1 黒砂質シルト　酸化物、有機物を含む。
14　2.5Y3/1 黒褐色砂質土　酸化物、有機物を含む。
15　10YR1.7/1 黒い有機物
16　5　Y2/1 黒　炭化物層
17　7.5Y2/1 黒粘質土　炭化物を多量に含む。
18　5　Y2/1 黒シルト　炭化物層　酸化物を多く含む。
20　2.5Y2/1 黒砂質土　炭化物を極めて多量に含む。
21　5　Y4/1 灰色粘質土　酸化物、炭化物を少量含む。
22　5　Y5/1 灰色粘質土　酸化物を微量に含む。
23　2.5Y3/1 黒褐色粘質土
24　2.5Y2/1 黒色粘質土　有機物含む。
24-1　24より粘質土、腐敗物多い。
25　2.5Y3/1 黒褐色砂
26　10YR3/1 黒褐色土　境界面に有機物があり分けられる。
27　2.5Y3/2 黒褐色砂層　ブロック粘土を含む。
28　2.5Y3/1 黒褐色土　炭化物含む。
29　2.5Y3/1 砂層　炭化物を含まない。
30　5　Y5/1 灰色粘土

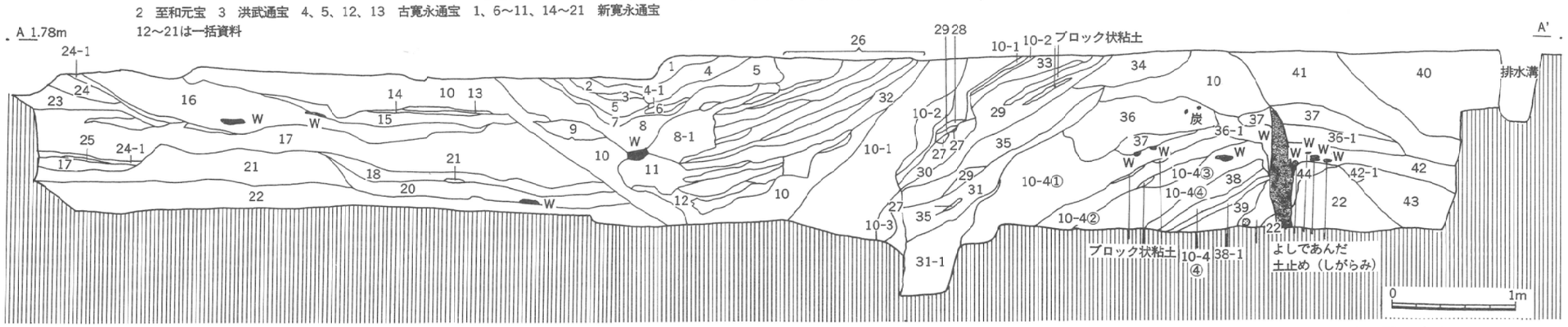


第7図　出土古銭拓影図（S＝1：2）

2　至和元宝　3　洪武通宝　4、5、12、13　古寛永通宝　1、6～11、14～21　新寛永通宝
12～21は一括資料

37　2.5Y2/3 黒褐色粘質土
38　10YR1.7/1 黒い堅い緻密な粘土
39　10→4と同じ系統でやや黒い砂質
40　5　Y3/2 オリーブ黒粘質土　粘土ブロックを含む。
41　2.5Y3/2 黒褐色粘質土　砂を含む。
42　2.5Y2/1 黒色砂層　有機質の植物を含む。
42-1　黒色砂層　明るい
43　2.5Y2/1 黒色砂層　黄色味を帯びる。

31　2.5Y3/1 黒褐色砂層　粘土ブロック
31-1　31より黒い
32　10YR4/6 粘土
33　2.5Y2/2 砂層
34　2.5Y5/3 黄褐色粘土
35　2.5Y3/1 黒褐色砂質土　堆に粘土を含む。
36　2.5Y4/2 暗灰黄色土
36-1　36と同じだが砂層である。



第8図　中央トレンチ断面層序（S＝1：40）

Ⅳ　出土した遺物

1　遺物の分布

出土遺物は陶磁器、土器、土製品、金属製品、石製品、木製品と多岐にわたり、整理箱にして46個を数える。そのうち24個が陶磁器である。そのほかに遺構より出土した杭、柱材などが78本ある。遺物集中地点はおよそ２カ所に別れる。調査区東側ＳＤ１堀跡内が最も遺物が多い。うち上層の遺物は明治初期堀埋め立て時に一気に入り込んだものと考えられる。一方調査区の西側48～51－７～８グリッドを中心として木製品が多く出土した。西側はその地点以外でも地層内の水分含有量が多く木製品や魚鱗等が広く出土している。全体としては1662年（元和８年）酒井氏入部以降の江戸時代を中心とする遺物である。なお遺物の器種、器形分類については基本的に亀ケ崎城跡第２次調査報告書に従っている。碗の大中小は120㎜、100㎜を、皿の大中小は250㎜、120㎜をその境界とした。以下種類別に主な遺物についてその特徴などを記述する。

2　陶器（第10図・図版４、５）

碗、皿、猪口、鉢(摺鉢、練鉢を含む)、盤、甕、壺、水注、土瓶、土鍋、油徳利、花生け、飯事道具が出土している。３、４、５は中国産の青磁である。小鉢（13）は口縁部内側に多数の打痕があり、灰落として使われたと考えられる。白化粧土で回転刷毛目装飾を外面に施し、胴の縁と鉄の褐色釉を使用している。現川焼きと思われるが有田の可能性もある。碗（15）は京焼風陶器と呼ばれるもので、底部は無釉、高台部分は断面角形に削られその中は平滑である。部分破片であるため印銘は確認されない。大鉢（17）は18世紀前半に盛行した刷毛目唐津である。高台断面等に京焼風陶器の影響が見られる。大皿（18）の高台内には墨書がある。摺鉢（21）は使い古されて底が抜けている。産地は不明である。なお摺鉢は10点程出土しているが掲載は２点にとどめた。(22)は越前系の甕で堀の底近くより出土しているが、火を受けた痕跡がある。花生け（23）には蛇と思われる飾りが付いている。この飾りの対角の部分にも飾りの付けられていた跡が残っている。

3　磁器（第11、12図・図版５、６）

碗、小坏、皿、猪口、鉢、盃洗、蓋、甕、壺、徳利、戸車、花瓶、急須、香炉、水滴、燭台、植木鉢、飯事道具、紅猪口等が出土している。磁器は江戸初期中国系が入っているほかは、長く肥前産の独占市場で、19世紀初頭瀬戸が染付生産に参入する。今回の出土数も肥前系磁器の割合が高い。碗は丸形（25、27、28、29、32）と端反形（26、30、33、34）に分けられる。肥前系磁器にあっては端反形が流行してくるのは18世紀後半である。用途としては大碗は飯椀、抹茶碗として、中碗は飯碗、抹茶碗、煎茶碗として、小碗、小坏は湯飲み茶碗、煎茶碗、酒坏等としての使用が考えられる。碗（31）は青磁染付で、見込みに五弁花コンニャク版、高台内にかなり崩れた「太明年製」銘がある。飯事はハレの日野外で行った食事が子供の遊びに取り入れられていったといわれている。飯事道具(42～44)は記録に残らない子供たちの暮らしぶりを今に伝えている。蓋類は組み合わせる器が特定

できないもののみ独立して扱った。(46、47) は碗の蓋で (47) のほうが時代が下ると考えられる。(48) は空気穴があり水注類の蓋と思われる。小皿 (52) の「富貴長命」銘は明末の民窯で使用されたものである。盃洗 (56) はほとんど底部のみである。

4　土器、土製品（第12、13図・図版６、７）

土器皿 (86) は割れた後に破断部を滑らかに加工して灯明皿に転用している。ごく低い付け高台がある。土人形 (96、97) は玩具あるいは信仰の道具といわれる。破損がひどいが、犬と大国天か。江戸遺跡で多く出土する泥面子、焼塩壺は今回は確認されていない。

5　金属製品（第７、12図・図版７）

整理箱に２箱出土した。煙管は７点出土したがうち４点を掲載した。(60) は全体が一体になったタイプである。雁首の形から (57) が (58) より古く、17世紀末から18世紀のものと考えられる。銅製の鏡 (62) は玩具と思われるが、堀の根固め杭の上部裏から出土した。簪 (64) は頭部が耳かきになっている。槍身 (85) は小型の袋槍で木部は失われていた。(84) も同様で、原形はより長いものだったと推定できる。小柄 (83) 鍔おさえ (80) 等とともに、調査区が城跡であることを意識させる遺物である。薬きょう (81) は第２次大戦時以前の物である。古銭は第７図の通りである。２、３が至和元宝、洪武通宝、他は寛永通宝でうち１は背面に「元」、12～21は50―19グリッドより一括して出土した。

6　石製品（第12、13図・図版７）

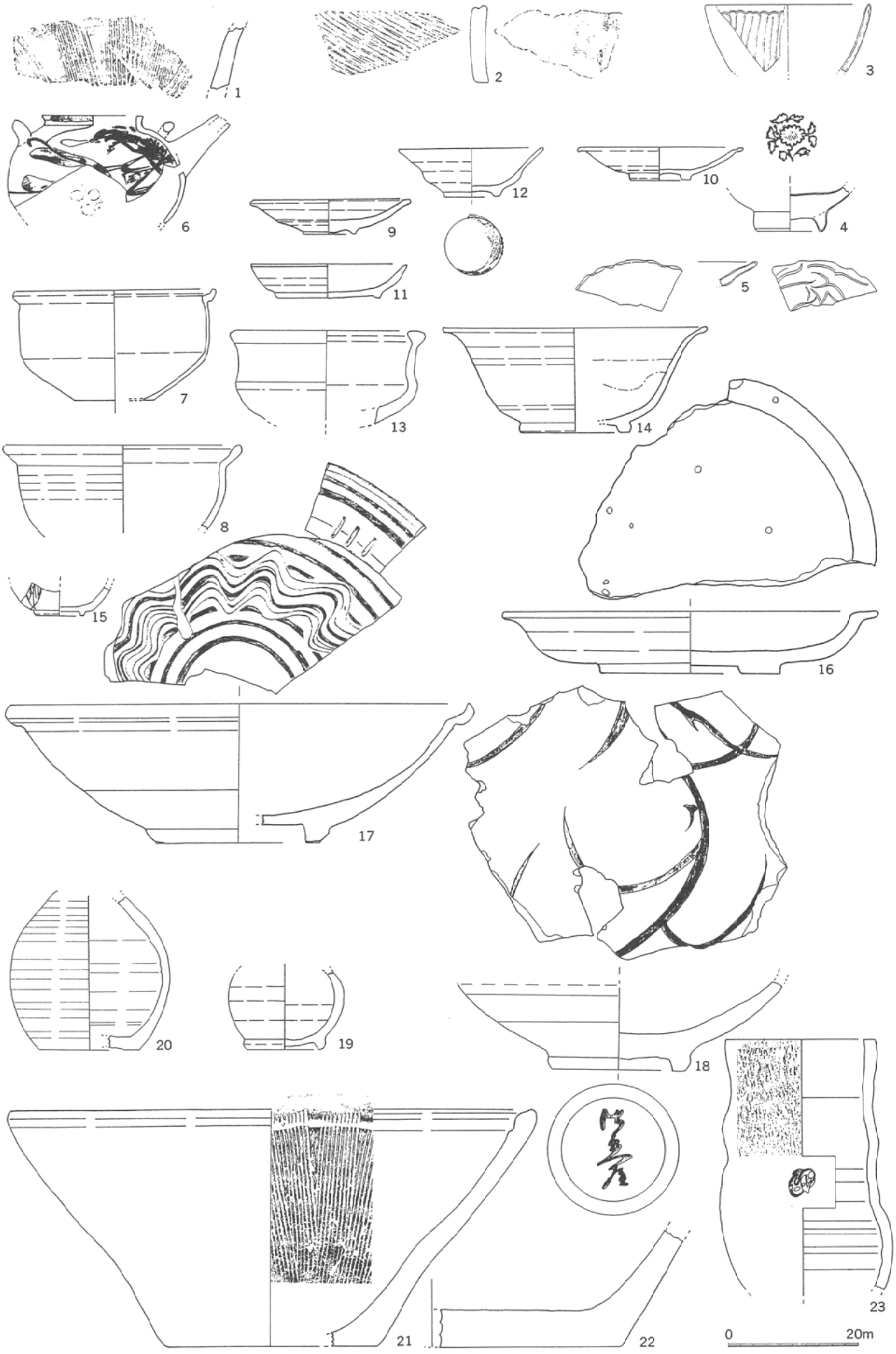
硯 (92)、砥石 (93～95) が出土している。

7　木製品（第13図・図版８）

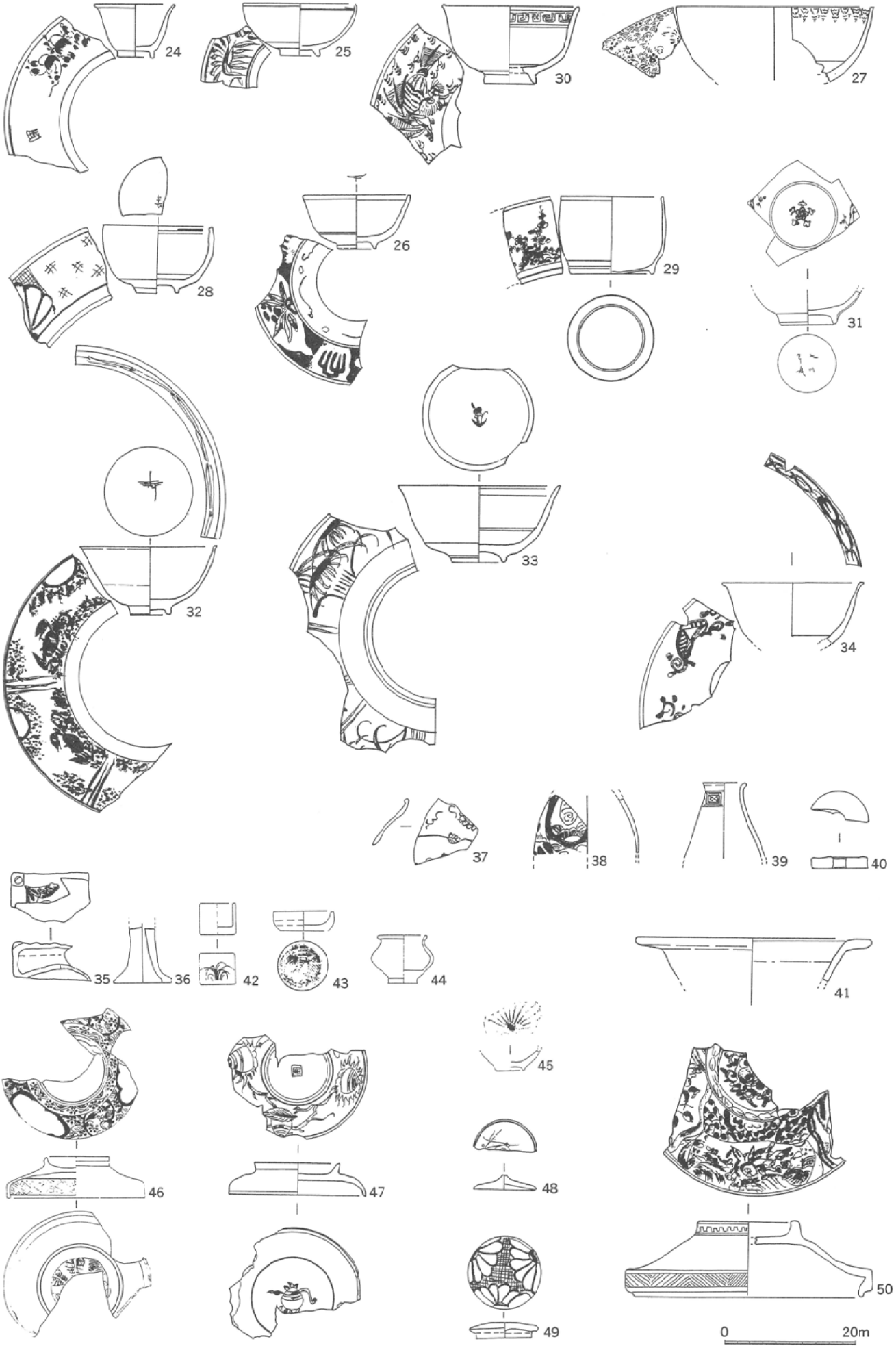
杭を除いて整理箱に15箱。(98) は現在と異なり服喪後一定の期間が経つと川などに流す習慣が最近まで見られた地域があったということで位牌としているが、卒塔婆とも考えられる。朱漆に高台内のみ黒漆の椀 (99) は木目に対して垂直方向から刳りを入れており高級品と考えられる。全面黒漆に三方円字文の皿 (100) は通常通り板材に刳りを入れている。下駄は全部で19点出土しておりそのうちの７点を掲載した。すべて一木から台部と歯を削り出している連歯下駄であるが細部は異なる。踵の部分が小さいもの (104、106、107) は足の前の方だけをひっかける構造だったのであろうか。(109) は連歯ではなく差歯の可能性もあるが通常の差歯下駄に比べて台部が高過ぎ、所謂ぽっくり下駄のような物ではないかと思われる。羽子板状板 (112) は使途不明である。他にも使途不明の木片は数多い。

8　その他の遺物

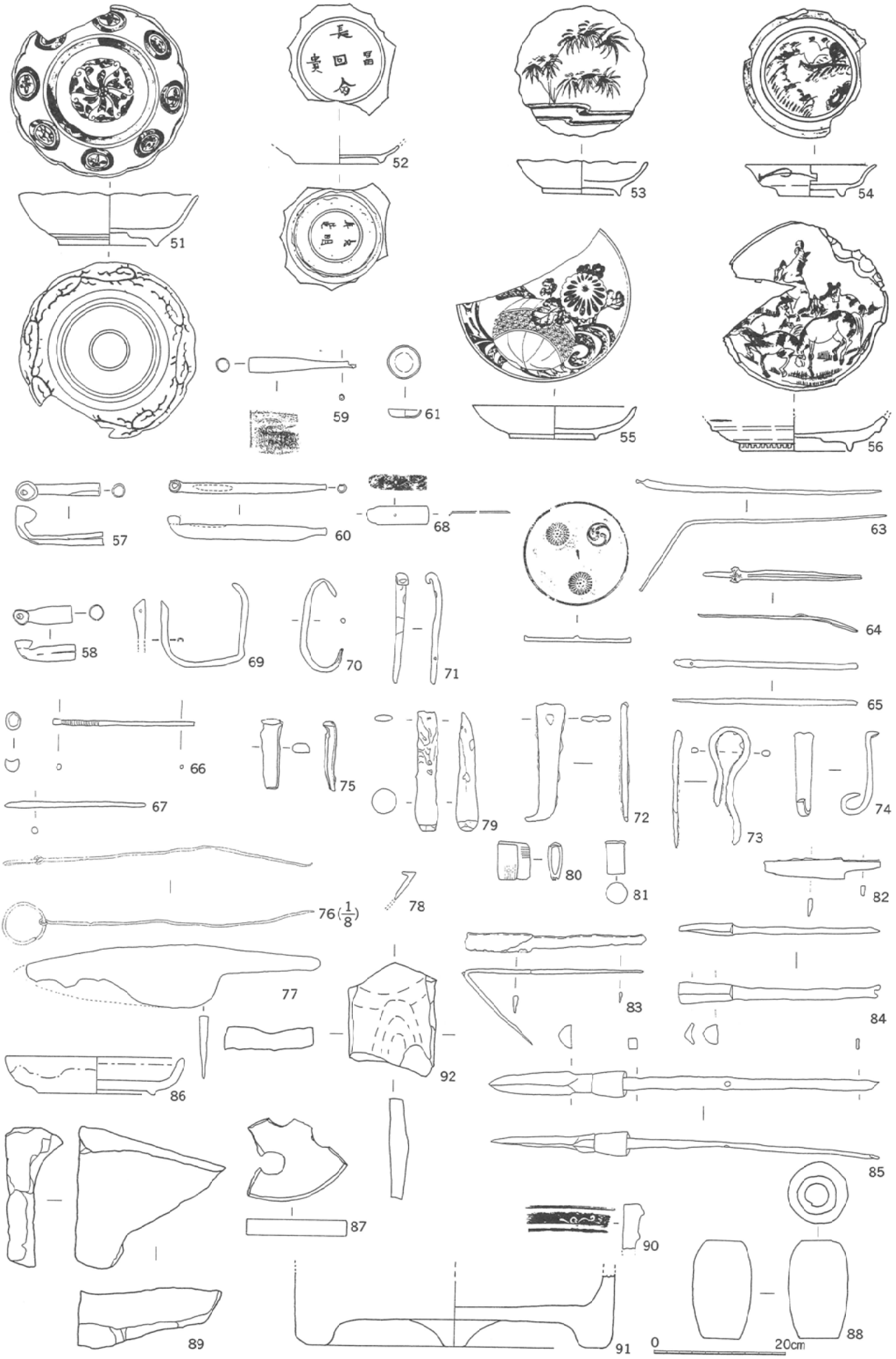
瓦９箱（旧制酒田中学校校舎のもの）。目薬の瓶、ワインボトル等のガラス製品。動物遺存体としてヒト、ニホンザル、カモシカ、ウマ、ガン、淡水に住むオオタニシ、汽水のヤマトシジミ、海水のハマグリ、バイ、サザエ、ツメタガイ、マガキ、種不明の魚鱗、種子としてオニグルミ、ヒメグルミ、モモ、キュウリ属メロン仲間、サクラ属サクラ節、クヌギ近似種が出土した。このなかでもモモ、キュウリ属メロン仲間、サクラ属サクラ節については食用とされている種類（サクランボ等）に類似している。オニグルミにも人為的な割跡が認められた。（動物遺存体、種子については㈱パレオ・ラボの報告書を要約）



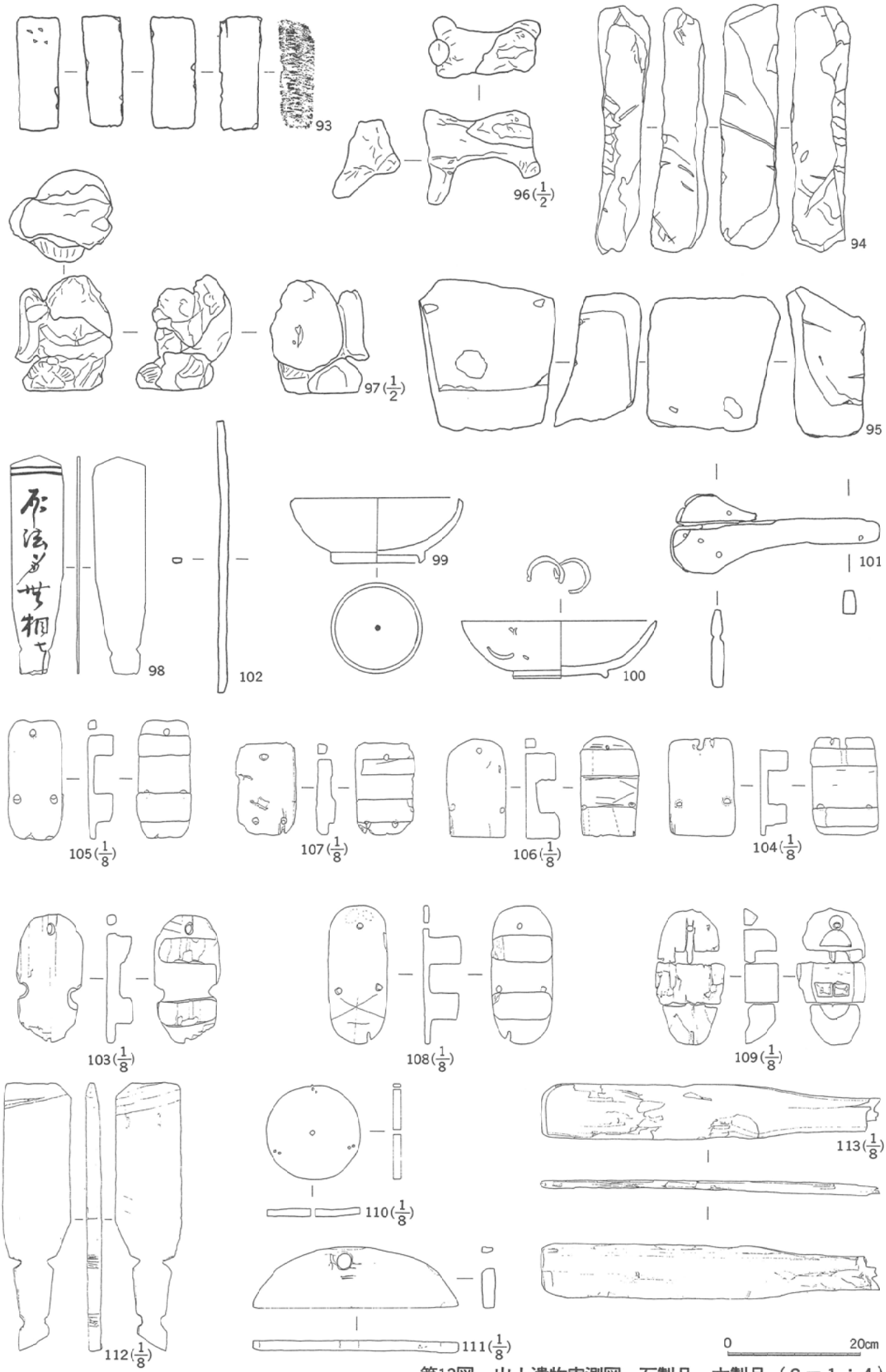
第10図　出土遺物実測図　陶器（S＝1：4）



第11図　出土遺物実測図　磁器（S＝1：4）



第12図　出土遺物実測図　磁器、金属製品、土製品、石製品（S＝1：4）



第13図　出土遺物実測図　石製品、木製品（S＝1：4）

表3　出土遺物観察表(1)

陶　磁　器

挿図	番号	出土地点	種別器種	形状特徴	法量(mm) 口径	底径	器高	最大径	重量(g)	形成	胎土色	装飾　印　銘　染付　釉薬　文様　その他	製作年代　製作地
第10図	1	51－17Ⅲ SD 1	陶器　摺鉢						(167)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	褐灰色	櫛目８条１単位 RP12	越前
	2	54－10Ⅶ SD 1	陶器　甕						81	アテ条線 叩タタキ	灰色砂混じり	堀根固め杭の根元より出土 RP31	14C～15C 珠州系
	3	中央トレンチ	陶器　碗		126				15		灰白色 N 7/0	青磁釉10Y 5/2 オリーブ灰 剣先蓮弁文	中国系　龍泉窯
	4	54－12Ⅵ SD 1	磁器　鉢			57			167		灰白色 N 7/0	青磁釉7.5Y 6/1 緑灰色 見込みに菊草花　RP30	12C～13C 中国系　龍泉窯
	5	54－8Ⅳ SD 1	陶器　盤		120		(18)		26		灰　色 N 6/0	青磁釉５GY 6/1 オリーブ灰色 飛雲劃花文	15C～16C 中国系　龍泉窯
	6	XO	陶器　土瓶		76		(85)	140	194	ロクロ	褐　色	透明釉　鉄絵松　緑釉	19C 大堀相馬系
	7	53－8Ⅱ	陶器　土鍋		154	(60)	(85)		89	〃	灰　色	外　鉄釉　底部無釉　内　灰色釉	在地系
	8	54－9Ⅳ SD 1	陶器　土鍋		184		(65)		117	〃	茶　色	内緑釉　外緑釉上面のみ 外下部に火にあたった跡	19C 中～末期 飯能系
	9	52－17Ⅱ	軟質陶器 小皿	折縁形	124	40	27		51	〃	〃	内白色化粧土一部外も。酒杯(取り皿)から灯明皿に転用か。RP11	瀬戸系
	10	54－18Ⅳ SD 1	陶器　中皿		124	46	25		120	〃	灰　色	乳白色釉 若干嵌入 熱を受けた部分に赤褐色 見込み高台内に重ね焼き痕	19C 肥後系唐津
	11	54－16Ⅳ SD 1	陶器　中皿	端反形	120	80	26		61	〃	灰茶色	灰釉　嵌入有り　重ね焼き痕	17C中期 瀬戸系美濃系
	12	53－17Ⅳ SD 1	陶器　小鉢		110	45	37		73	〃 糸切痕		灰釉　内全面　外一部　重ね焼き痕 RP24	16C末～17C 肥後系唐津
	13	54－17Ⅳ SD 1	陶器　小鉢		170		(78)		164	ロクロ	薄茶色 砂混	外刷毛目文様 上部緑釉掛け 底部鉄釉 口縁部打痕有り 灰落としか。RP23	17C末～18C末 肥後系唐津現川
	14	52－17Ⅱ	陶器　中鉢	腰折形	206	86	81		88	〃	茶　色	灰釉　緑釉	19C～ 瀬戸美濃系
	15	XO	陶器　碗			36			25	〃	灰白色	透明釉　底部無釉　若松文 京焼風陶器	17C後～18C前 肥後系
	16	54－7Ⅱ	陶器　大皿	鍔縁形	290	138	48		661	〃	灰　色	灰釉　見込み砂目７カ所　嵌入有り RP 3	19C後 瀬戸美濃系
	17	54－18Ⅲ SD 1	陶器　大鉢		356	128	107	口縁 366	602	〃	赤褐色	内刷毛目上部緑釉流し　刷毛目唐津 RP15	18C前 肥前系唐津
	18	54－9Ⅳ SD 1	陶器　大皿			104			1,038	〃	茶　色	内外白化粧土　透明釉　草花文 高台内に墨書 RP21	肥前系唐津
	19	54－13Ⅵ SD 1	陶器　甕			60		90	78	〃	灰　色	内素焼き　外鉄釉	
	20	54－11Ⅵ SD 1	陶器 油徳利			38	(120)	124	174	〃	白茶色 砂質	外鉄釉横に線　内上面釉 RP27	
	21	50－7Ⅵ	陶器摺鉢		414	166	181		4,621	〃	灰白色	櫛目10条１単位 RP29	
	22	54－8Ⅶ SD 1	陶器　甕			294			1,049		茶　色	破損後火を受けている RP26	16C以前 越前系
	23	53－7Ⅱ	陶器 花生け		116		(195)		987		灰白色	内鉄釉　外削り痕　蛇形飾り RP 2	
	24	54－13Ⅵ SD 1	磁器　小坏	端反形	62	28	41		41	〃	白　色	外染付　草花文と異体字	18C 肥前系
	25	52－7Ⅱ	磁器　小碗	丸形	86	30	40		12	〃	灰白色	外色絵	肥前系
	26	XO	磁器　小碗	端反形	82	30	41.5		48	〃	白　色	外色絵　草花文	18C後 肥前系
	27	49－19	磁器　大碗	丸形	152				13	〃	白　色	染付　内環珞文	
	28	54－16Ⅴ SD 1	磁器　小碗	丸形	84	32	51		41	〃	灰　色	染付　外氷割菊花文　くらわんか茶碗　見込み崩し寿　砂底	18C 肥前系波佐見
	29	54－9Ⅶ SD 1	磁器　小碗	丸形	80	64	60	82	13	〃	灰白色	染付　外梅文	17C中～18C末 肥前系
	30	XO	磁器　中碗	端反形	106	41	60		40	〃	白　色	染付　内雷文　外鳥文	18C後 肥前系
	31	XO	磁器　碗			44			52	〃	白　色	青磁染付 内梅文 外青磁釉 見込み五弁花コンニャク版 高台内「太明年製」崩れ	17C末～18C末 肥前系
	32	XO	磁器　小碗	丸形	102	32	54		102	〃	白　色	染付　内松葉継ぎ　外海辺に蟹二方見込み崩し寿	18C～ 肥前系
	33	53－8Ⅱ	磁器　中碗	端反形	124	40	59		149	〃	白　色	染付　外草文三方　見込み花 くらわんか茶碗	19C前～中 肥前系波佐見
	34	XO	磁器　中碗	端反形	110		(47)		41	〃	灰白色	染付　内亰花文　外花文 くらわんか茶碗	19C中 肥前系波佐見
	35	XO	磁器　水滴						39	形押し	白　色	染付　底布目	18C中～19C中 肥前系
	36	XO	磁器 燭台の足			47	(43)		37	ロクロ	白　色	青色釉	
	37	中央トレンチ	磁器 香油壷						11	〃	灰　色	染付	肥前系
	38	54－13Ⅵ SD 1	磁器 髪油壷						12	〃	白　色	色絵	肥前系
	39	XO	磁器　徳利		38				19	〃	灰白色	染付	19C～ 肥前系
	40	54－8Ⅵ SD 1	磁器　戸車		径 44	内径 8	厚さ 8		13	〃	白　色	白紙	19C～ 瀬戸美濃系
	41	52－7Ⅱ	磁器 植木鉢		182		(32)		32	〃	白　色	瑠璃釉	19C 肥前系
	42	54－10Ⅶ SD 1	磁器 飯事道具		28	28	24		15	〃	白　色	染付　草文	
第11図	43	52－9	陶器 飯事道具		46	38	15		21	〃 糸切痕	茶　色		
	44	51－9	磁器 飯事道具		39	22	37	32	32	ロクロ	白　色	白磁	
	45	54－16Ⅴ SD 1	磁器 紅猪口	輪花	23		(20)		10	〃 形押し	白　色	白磁　内菊形押し	

表4　出土遺物観察表(2)

挿図	番号	出土地点	種別器種	形状特徴	法量(mm) 口径	底径	器高	最大径	重量(g)	形成	胎土色	装飾 印銘 染付 釉薬 文様 その他	製作年代 製作地
第11図	46	53－16Ⅱ	磁器 蓋		104	50	32		70	ロクロ	白色	染付 内四方襷 見込み葉 外草花文	17C末～18C末 肥前系
	47	52－13	磁器 蓋		104	65	25		67	〃	灰白色	染付 外唐草に栗 見込み巾着 高台中に変形字	18C後～19C 肥前系
	48	54－14Ⅵ SD 1	磁器 蓋		径48		11		6	〃	白色	染付 口縁部釉禿げ 外松葉	
	49	XO	磁器 蓋		54		11		21	〃	白色	染付 外氷割菊花文 口縁部釉禿げ	肥前系
	50	53－8Ⅱ	磁器 蓋		191	80	57		203	〃	白色	染付 兎草花文	19C～ 肥前系
第12図	51	53－9Ⅱ	磁器 中皿	輪花	138	76	38		191	〃	白色	染付 内芙蓉手文 見込み花文 外唐草 高台内蛇の目釉剥ぎ 青花皿の模倣	17C後～18C後 肥前系
	52	54－16Ⅷ SD 1	磁器 皿			66	(15)		51		白色	染付 見込み「富貴長命」 高台内「大明年造」 高台釉禿げ RP32	17C前 中国系 明末の民窯か
	53	54－8Ⅲ SD 1	磁器 小皿	輪花	100	60	25		116	ロクロ	白色	染付 竹と流れ くらわんか系か RP10	18C 肥前系波佐見
	54	XO	磁器 小皿	陵皿形	100	52	24		80	〃	白色	染付 内松に船 外松葉三方 漆継ぎの跡	17C後～18C初 肥前系
	55	53－16	磁器 小皿		126	68	25		85	〃	白色	染付 内菊と蝋	19C 瀬戸美濃系
	56	51－10Ⅱ	磁器 盃洗			84	(27)		177	〃	乳灰色	染付 見込み馬と草 蛇の目凹形高台	18C 肥前系
	86	48－7Ⅴ	土器 中皿		138	98	29		142		茶色	口縁部に煤、灯火具に転用か。 割れた面に加工跡 RP20	
	87	54－13Ⅵ SD 1	土器 七輪さな		63			厚さ12	54		茶色		在地
	89	53－8Ⅱ	炻器 行火				(118)		194	板作り	灰白色		
	90	中央トレンチ	炻器 風炉						48		灰色		
	91	53－7Ⅱ	炻器 焜炉			244			239		茶色		

金属製品

番号	出土地点	種類	材質	法量(mm) 幅	長さ	高さ	重量(g)	備考
57	54－8Ⅳ SD 1	煙管 雁首	銅	火皿径12	65	接合部径8	8	RM11
58	54－12Ⅵ SD 1	煙管 雁首	銅	〃 11	43	〃 12	8	
59	54－9Ⅵ SD 1	煙管 吸口	銅		(80)	〃 11	9	表面に模様
60	54－12Ⅴ SD 1	煙管	銅	9	122	幅11 厚さ7	27	一体型
61	XO	灰落とし	銅	口径26		6	8	
62	53－8Ⅴ SD 1	鏡	銅	〃 80		5	69	RM14
63	50－13Ⅴ SD 1	簪	銅		210	最大幅5	14	RM13
64	XO	簪	銅		123	厚さ1	5	基部に放射状の細工
65	54－7Ⅳ SD 1	簪	銅		(140)	最大幅6	9	上部に穴 RM8
66	54－9Ⅵ SD 1	火箸	銅	径5	(210)		15	頭部に別金具付き
67	49－12Ⅱ	火箸	銅	〃 4.5	(107)		9	先端欠損
68	49－9Ⅱ	飾り金具	銅	14	48	厚さ1	4	RM2
69	54－9Ⅳ SD 1	金具	銅	8.5	167	〃 4	11	
70	54－9Ⅵ SD 1	箪笥 取っ手	鉄	横72	132	〃 3.5	7	
71	54－8Ⅵ SD 1	釘	鉄	〃 10	縦85	〃 5	12	
72	54－12Ⅵ SD 1	用途不明	鉄	〃 31	〃 91	〃 4	3	
73	54－11Ⅵ SD 1	用途不明	鉄	〃 31	〃 90	〃 6	13	
74	52－8	用途不明	鉄	15	高さ64	厚さ5	22	
75	54－14Ⅵ SD 1	釘	鉄	縦(53)	横17	〃 4.5	13	
76	54－16Ⅵ SD 1	自在鉤	鉄	輪径65	477	〃 4	39	
77	52－12	包丁	鉄	(49)	233	〃 7	118	
78	54－9Ⅷ SD 1	鉄鍋	鉄	径(54.6)			63	
79	54－8	鑿の先	鉄	縦92	横18	厚さ19	72	
80	52－9	鍔押さえ		11	25	29	15	
81	54－11	薬きょう	鉄	口径17	26		5	
82	53－8Ⅳ SD 1	刀子	鉄	4	(88)	13	10	RM3
83	XO	小柄	鉄	高さ13	210	厚さ3	27	
84	51－7Ⅵ	槍身	鉄	17	(154)	10	47	先端部欠損 RM16
85	48－8Ⅴ	槍身	鉄	18	310	10	91	RM12

木製品

挿図	番号	出土地点	器種	法量(mm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	備考
第13図	98	51－7Ⅴ SD 1	木製品 位牌	167	40	3	12	墨書有り RW171
	99	51－7Ⅴ	木製品 大碗	口径134	底径72	器高51	125	朱漆高台内黒漆赤点 RW36
	100	51－7Ⅴ	木製品 中皿	〃 152	〃 75	〃 44	106	全面黒漆、三方に文様 RW35
	101	49－8Ⅴ	木製品 箸	160	60	9	32	全面赤漆 RW34
	102	54－17Ⅱ	木製品 箸	28	6	4	4	RW1
	103	XO	木製品 下駄	194	102	52	346	連歯下駄 RW6
	104	49－16Ⅵ	木製品 下駄	149	101	40	351	連歯下駄 RW109
	105	49－17Ⅵ	木製品 下駄	180	81	39	358	連歯下駄 RW43
	106	51－16Ⅵ	木製品 下駄	148	90	52	526	連歯下駄 RW114
	107	49－7Ⅵ	木製品 下駄	140	92	30	211	連歯下駄 RW111
	108	48－15	木製品 下駄	218	94	60	559	連歯下駄 RW4
	109	49－9Ⅴ	木製品 下駄	205	105	50	483	ぽっくり下駄 RW41
	110	50－8Ⅴ	木製品 曲物底	径145		11	180	RW113
	111	51－7Ⅴ	木製品 曲物蓋	〃 316	93	16	362	RW40
	112	49－13Ⅳ	羽子板 状板	412.5	103	17	585	RW131
	113	48－13Ⅲ	木製品 櫂	517	85	15	580	RW3

石製品　土製品

挿図	番号	出土地点	器種	法量(mm) 縦	横	内径	重量(g)	備考
第13図	88	54－8Ⅳ SD 1	土製品 土錘	縦74	横45.5	内径17	153	RP19
	92	53－8Ⅲ SD 1	石製品 硯	〃 87	〃 78	25	126	RQ1
	93	52－8Ⅳ	石製品 砥石	〃 82	〃 29	32	141	RQ18
	94	54－18Ⅵ SD 1	石製品 砥石	〃 185	〃 47	43	434	
	95	54－7Ⅳ SD 1	石製品 砥石	〃 104	〃 115	62	808	RQ17
	96	54－19Ⅳ SD 1	土製品 人形	〃 36	〃 42.5	高さ28	17	動物（犬か） 18C後半～19C RP22
	97	54－8Ⅳ SD 1	土製品 人形	〃 44	〃 38	〃 36	33	大黒天 18C後半～19C RP16

V　調査のまとめ

本遺跡の発掘調査は県立高等学校校舎等整備事業の実習室建設に係わる緊急発掘調査であった。調査の主な成果を次にまとめる。

1　調査の結果内堀と見られる溝跡１、土壙１、旧制酒田中学校校舎土台跡を検出し、陶磁器、木製品、金属製品等の遺物が数多く出土した。内堀の確認によってこれまで行われてきた調査の調査区が亀ケ崎城内においてどの位置にあたるかという推定がいっそう確かになり、堀の向きやその構造にも新しい発見があった。

2　本調査区を含む亀ケ崎城跡は幕末廃城の後、しばらく官地であったが明治13年(1880)民間に払い下げられ畑地となっており、その後大正９年（1920）旧制酒田中学校校舎建築が行われている。Ⅰ、Ⅱ層は校舎建築の影響を受けており、Ⅲ、Ⅳ層は明治初期の埋め立て跡および畑地の跡と考えられる。Ⅳ層より出土した木の根は畑地の面にあたる。

3　酒田東高所有の鳥瞰絵図には、家老屋敷の塀と内堀の間に小道と馬場が描かれている。このことから堀のそばの締まった地面は馬場の跡であり、調査区の西外の小道との間に廃棄場所となる湿地が存在したとも考えられる。埋め立てられていた壁材などは家老屋敷側の塀ではないかと考えられる。亀ケ崎城は大火や地震等で何度か被害を受けているが、出土した木材などに焼けた跡が見られず、廃城後の取り壊しによるものの可能性が高い。

4　層序との関連からⅡ層までと堀の上層遺物は明治初期に廃棄された可能性が高い。一方西側のⅤ層以下の遺物は亀ケ崎城が居城として機能した江戸時代の廃棄物であると考えられる。堀の下部に近いところは双方の遺物の存在していると思われる。堀の底近くから中国産青磁や中世陶器が出土し、亀ケ崎城が近世以前に遡る可能性が感じられるが、それに伴う遺構は検出されなかった。

5　陶磁器の製作年代は上記の遺物を除けば17世紀から19世紀のものがほとんどを占める。Ⅱ層までと堀の上層遺物には19世紀と思われる遺物のほとんどが含まれる。(中には近代、現代と言える遺物も存在した)

6　陶磁器の産地は前回の調査と同様に、肥前系の占める割合がきわめて多かった。日本海をその媒介とする交易の活発さが改めて立証されたことになる。しかしこの場所は城内で家老屋敷のそばであったことを考えると、遺物の多くは上級武士の生活の様子を表すものと判断される。

参考文献

佐藤正俊他『亀ケ崎城跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第169集　1991年
野尻　侃他『亀ケ崎城跡第２次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター 調査報告書第17集　1994年
新宿区内藤町遺跡調査会『内藤町遺跡発掘調査報告書』1992年
新宿区内藤町遺跡調査会『新宿内藤町遺跡に見る江戸のやきものと暮らし』1993年
新宿区厚生部遺跡調査会『細工町遺跡発掘調査報告書』1992年
東京都埋蔵文化財センター『丸ノ内三丁目遺跡発掘調査報』東京都埋蔵文化財センター調査報告第17集　1994年
宮城県教育委員会『上野館跡―近世茂庭氏居館跡発掘調査報告書』1993年
大橋康二　考古学ライブラリー55『肥前陶磁』ニューサイエンス社　1993年
扇浦正義『江戸発掘』名著出版　1993年
酒田市史編纂会『酒田市史』1989年
山形県史編集委員会『山形県史』1989年

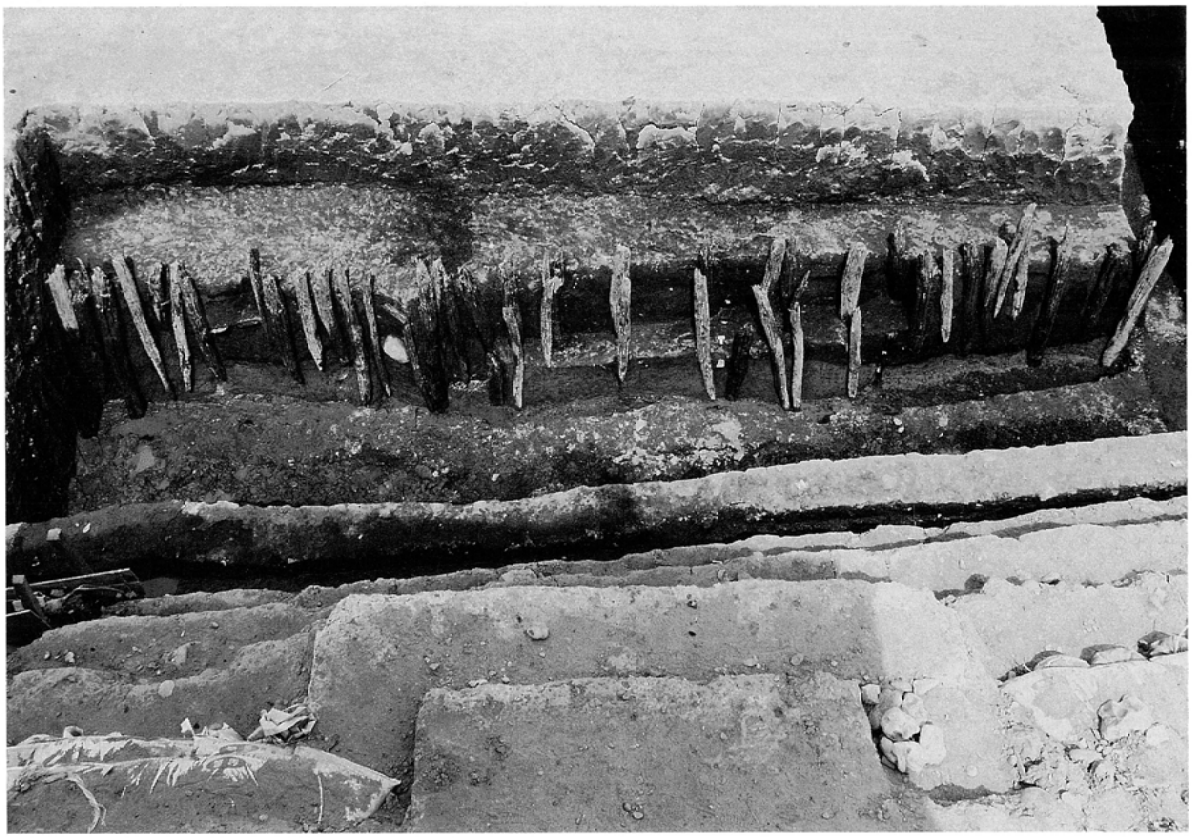
報告書抄録

ふりがな	かめがさきじょうあとだい3じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	亀ケ崎城跡第3次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第28集
編集者名	小関真司
編集機関	財団法人　山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999—31　山形県上山市弁天二丁目15番1号　TEL　0236—72—5301
発行月日	西暦　1995年3月31日

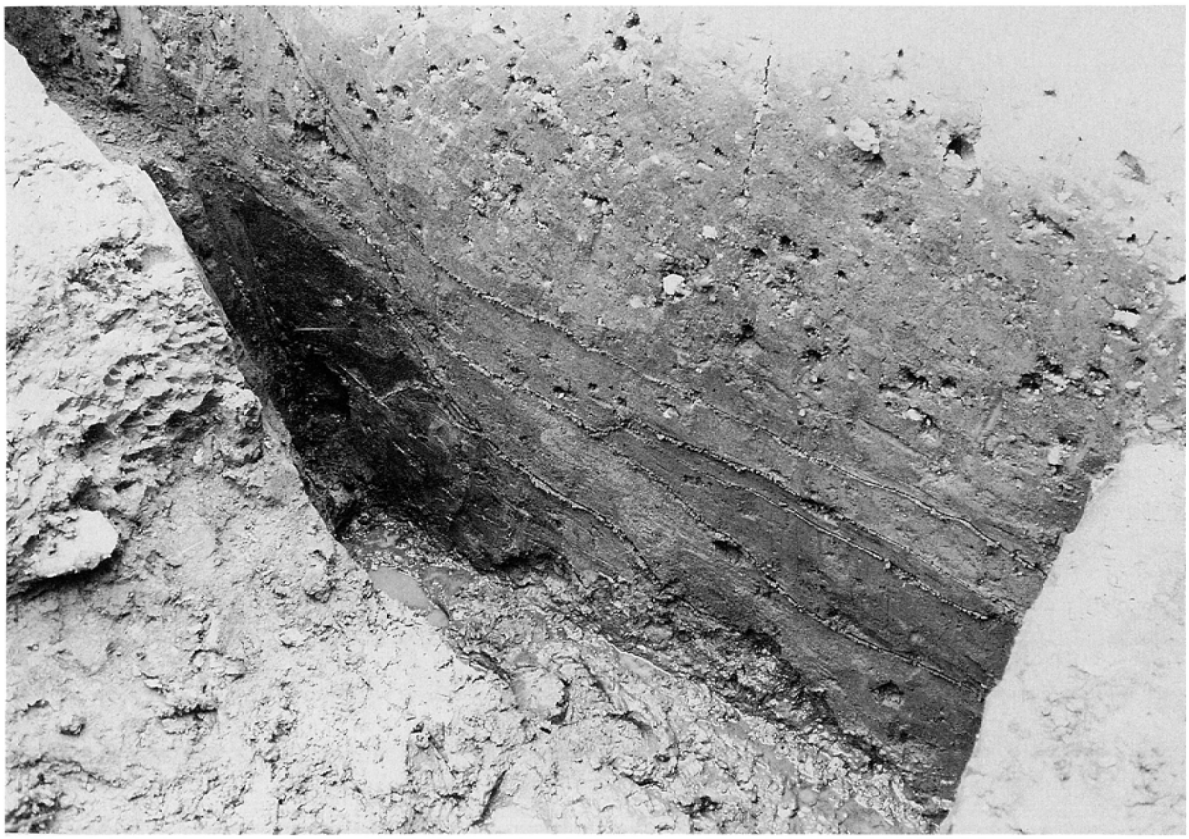
所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
亀ケ崎城跡（かめがさきじょうあと）	山形県酒田市亀ケ崎（やまがたけんさかたしかめがさき）	6204	2071	38度55分5秒	139度51分3秒	19940621～19940812	600	県立高等学校校舎等整備事業（実習室）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
亀ケ崎城跡	城館跡	江戸時代	堀跡　1条 土壙　1基	近世陶磁器	本丸と二の丸を隔てる内堀を確認
				陶器（碗、皿、鉢、甕、壺） 磁器（碗、皿、坏、盃洗） 石製品（硯、砥石） 木製品（箸、椀、下駄） 金属製品（槍身、煙管）	近世陶磁器、槍身等の金属製品、下駄等の木製品が多数出土。日本海交易の繁栄、上級武士の生活の様子がしのばれる。

図　　版



堀の根がため杭列（東より）



堀の断面層序（南より）

図版２

中央トレンチ断面層序（南西より）

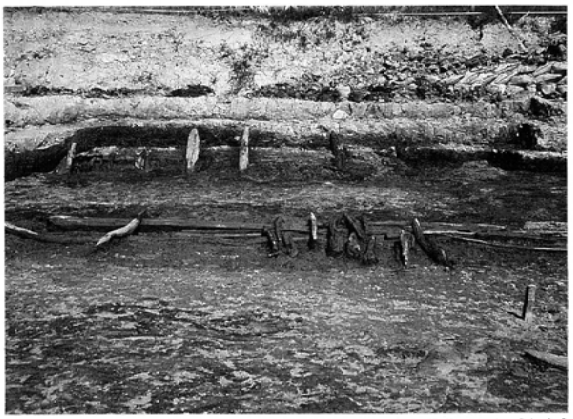
堀の根がため杭としがらみ

木の根と木舞

旧制酒田中学校校舎土台（西より）

調査作業状況

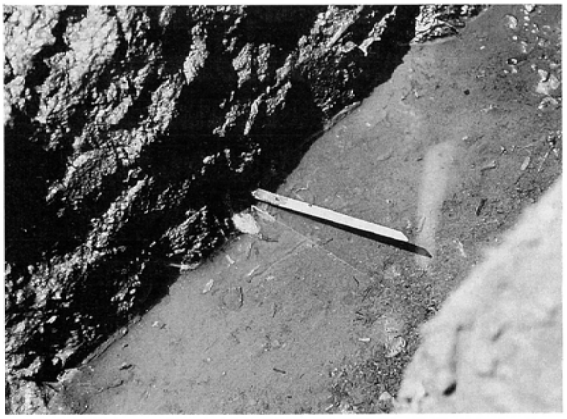
ＳＫ4土壙



西側壁材と柱材

ＲＰ16土人形出土状況

ＲＰ11皿出土状況



ＲＭ12槍身出土状況

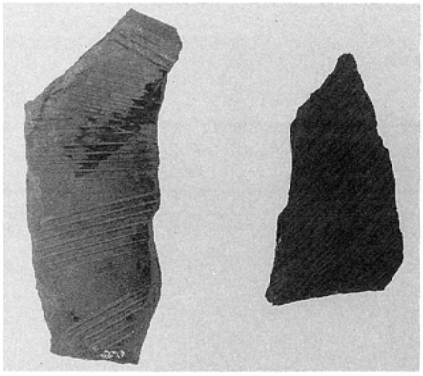
ＲＭ6－1～10古銭出土状況

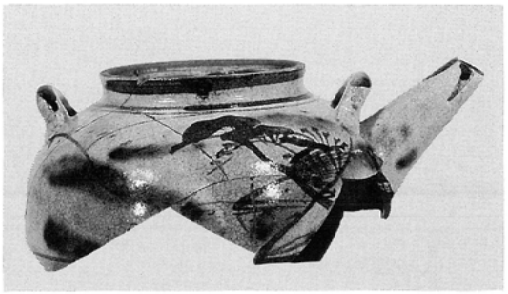
ＲＷ36木椀出土状況

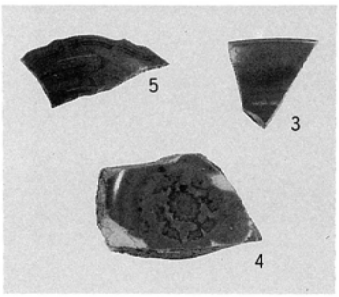
現地調査説明会状況

図版 4

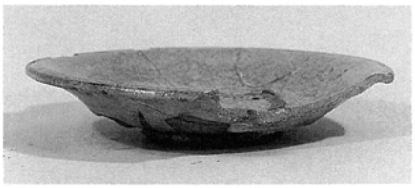
4

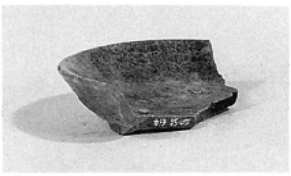

1.2


6

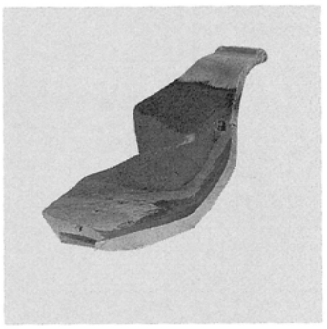


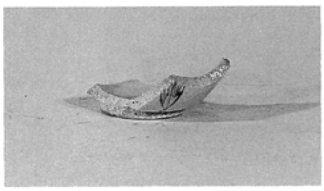
9

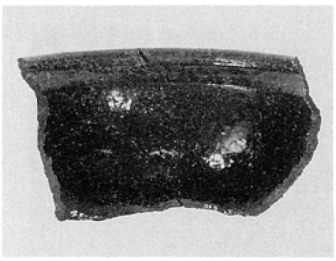

10


11

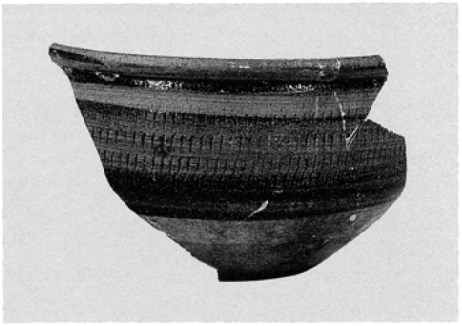
12

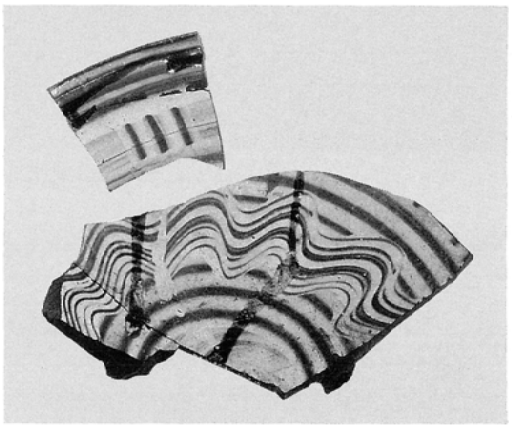

14

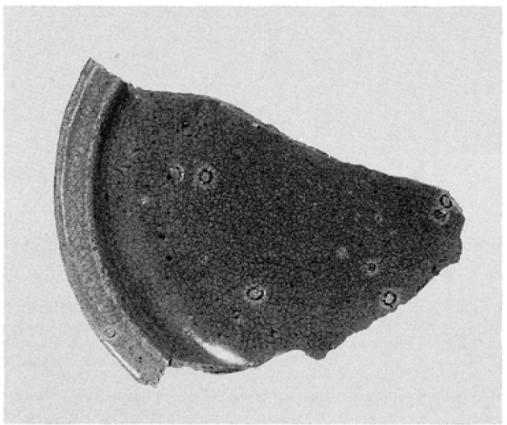

15

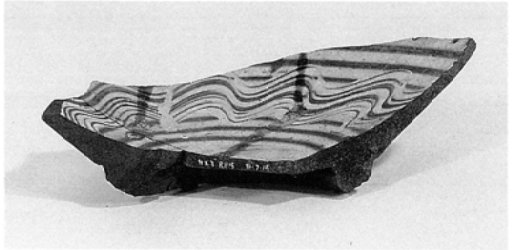

8

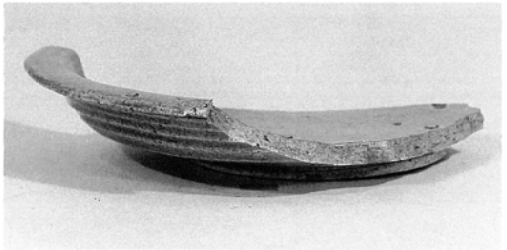
13


7





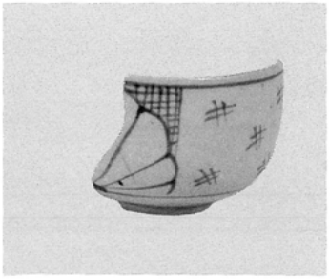

17


16

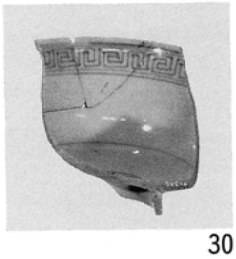
24

26

29


28

34

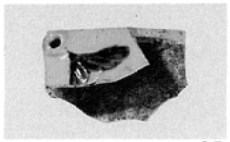

30

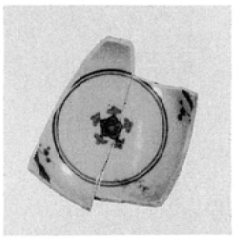
32

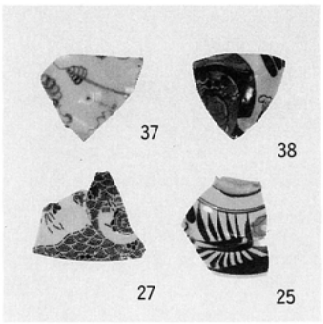
33

39

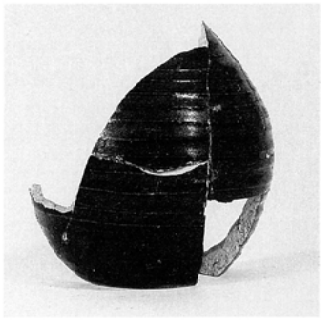
36

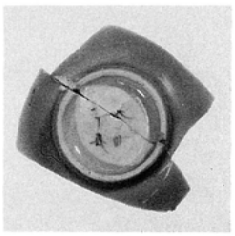

35



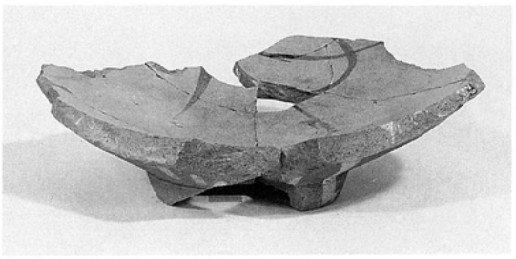


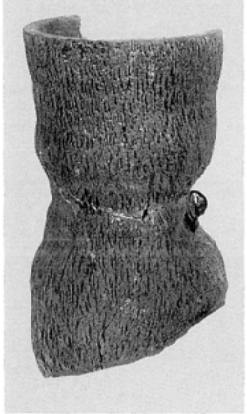
19

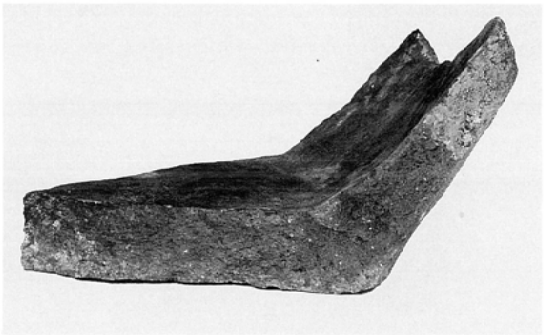

20

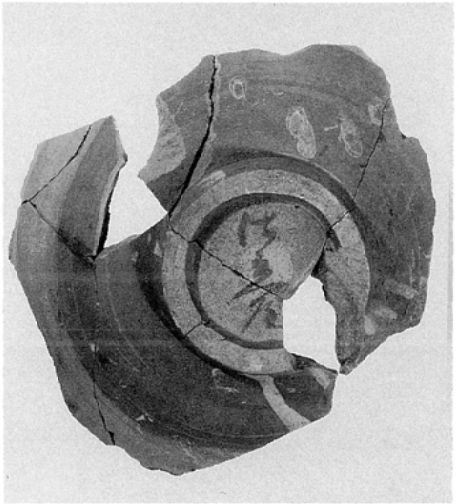

31

21

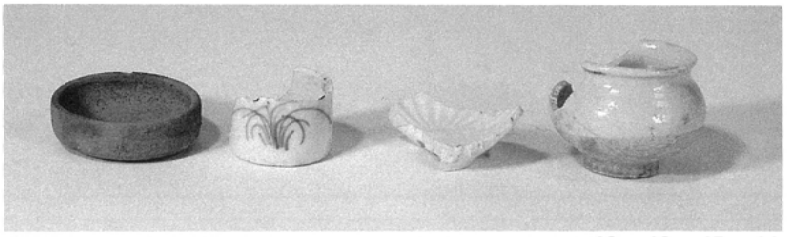



23

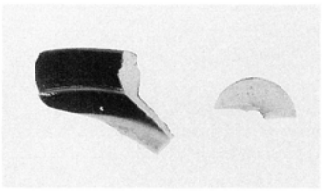

22


18

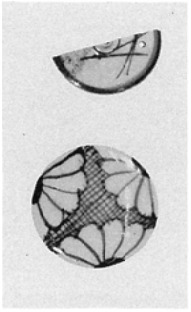
図版 6



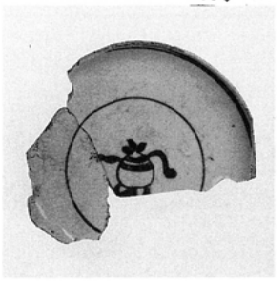
43、42、45、44



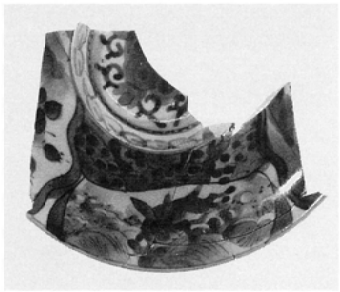
40、41



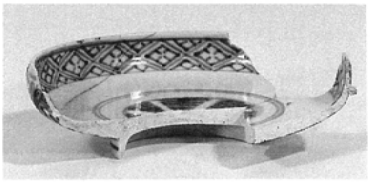
48、49

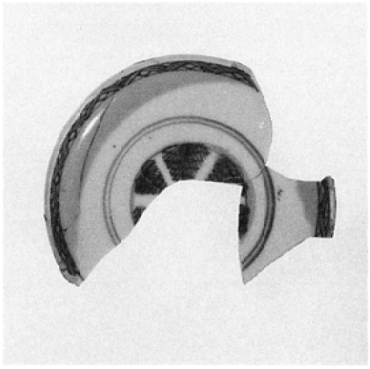


47



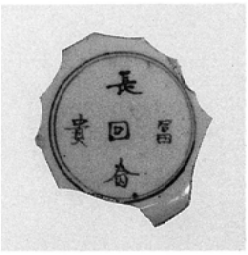
50

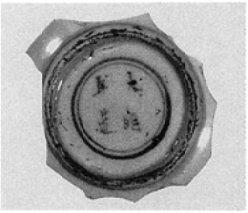




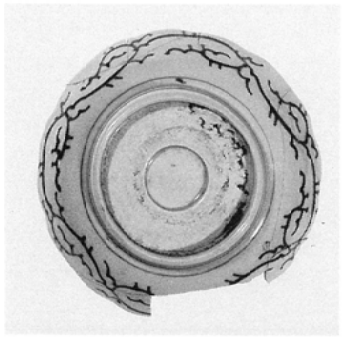
46

53

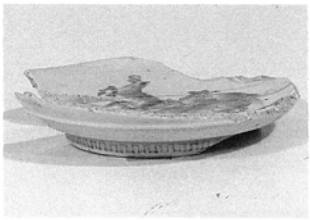




52



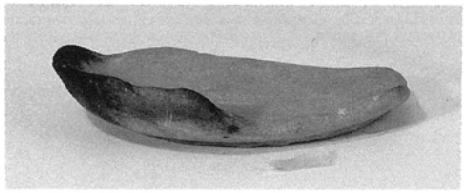
51



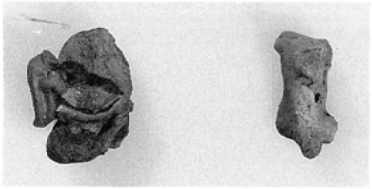
56

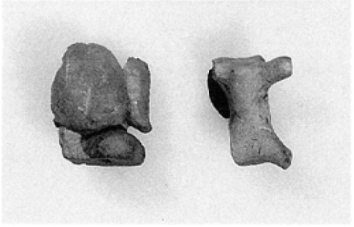
54

55

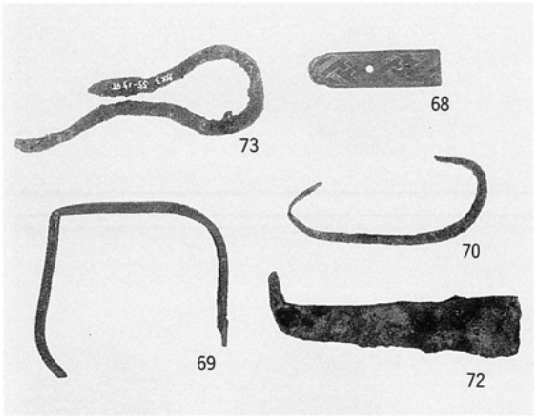


86

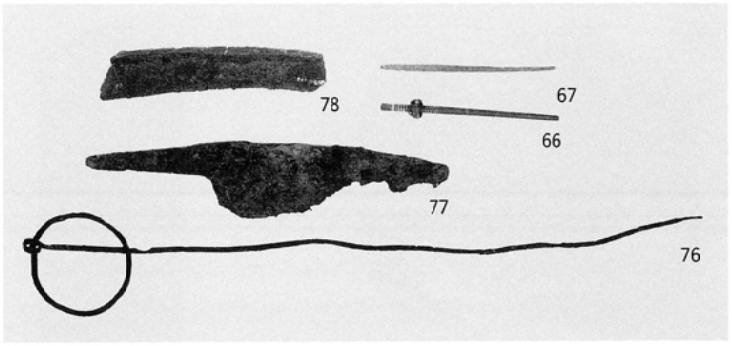




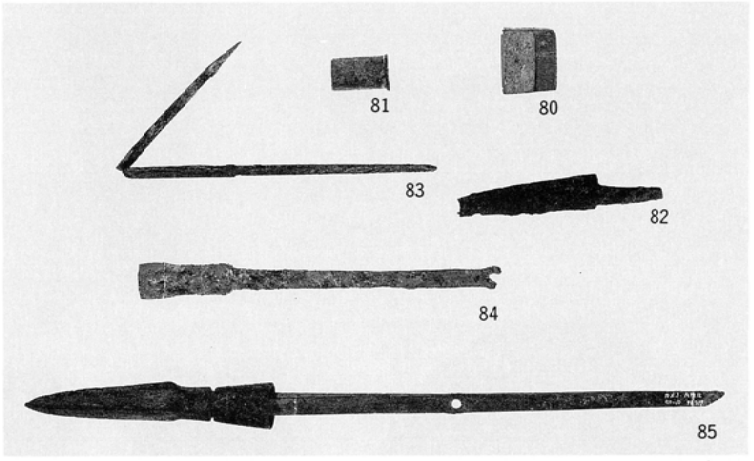
97、96



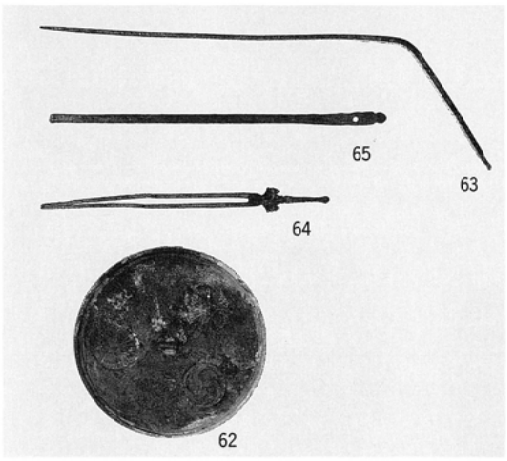
金具



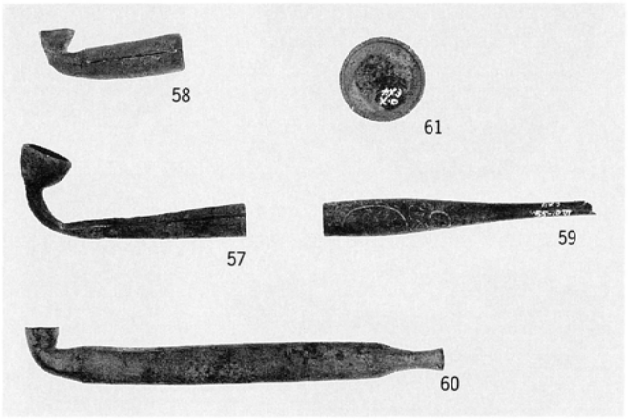
生活用具



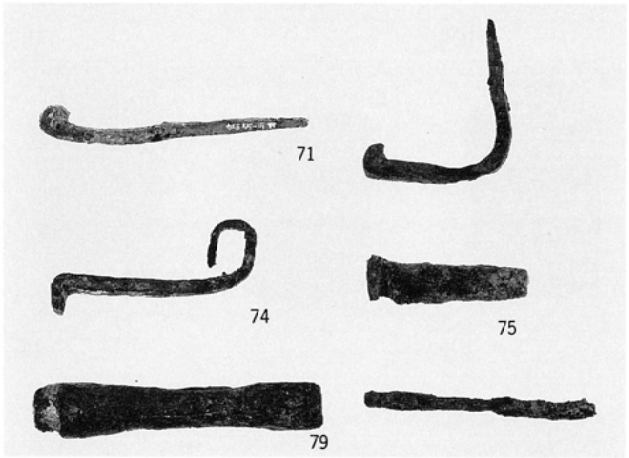
小柄、槍身等



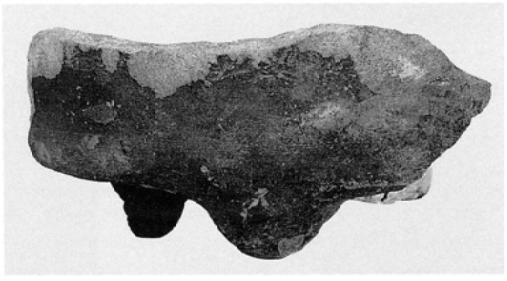
鏡、簪

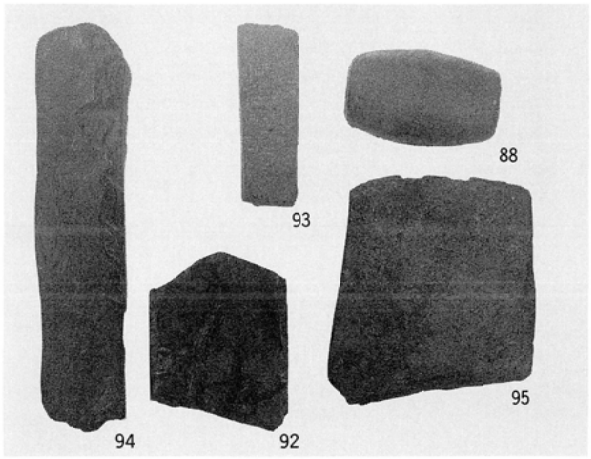


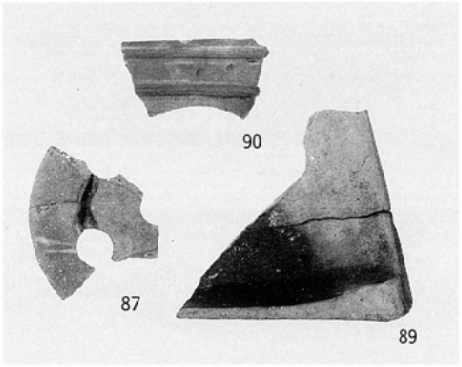
煙管



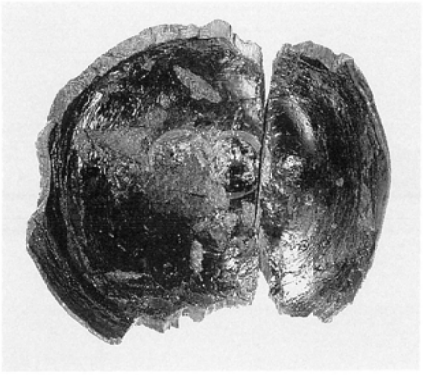
釘等

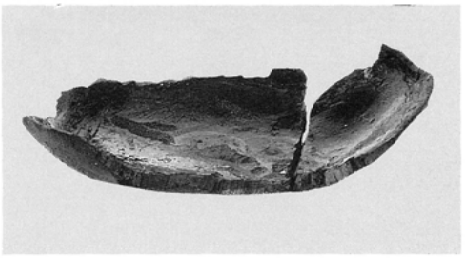




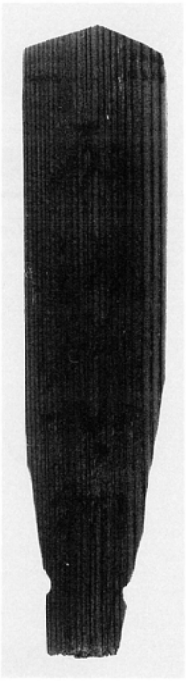


図版 8

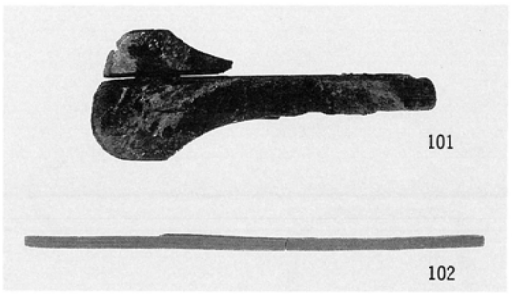




100

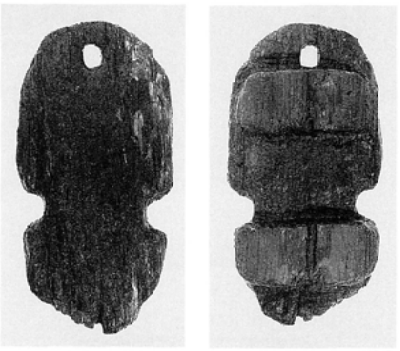


98

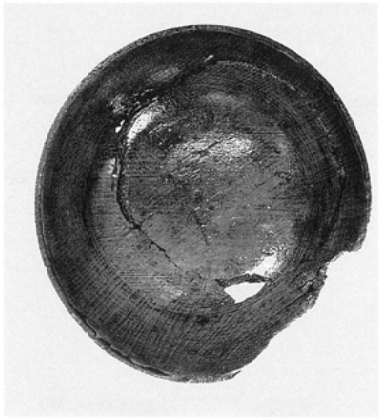


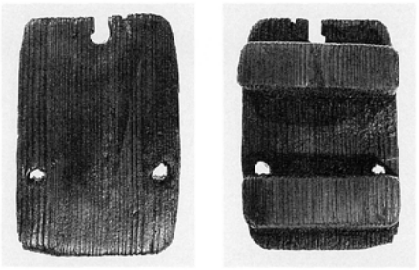
101

102

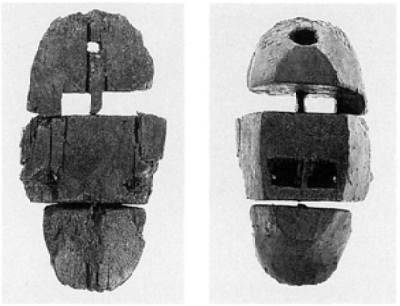


103



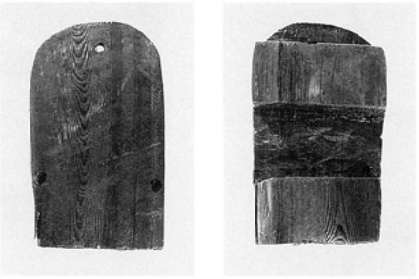


104

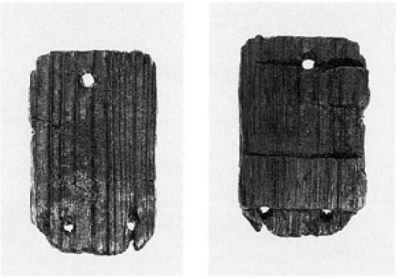


109

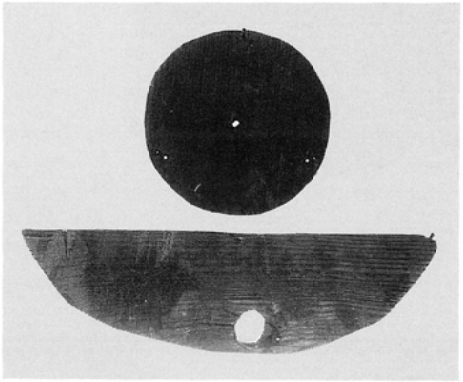
99



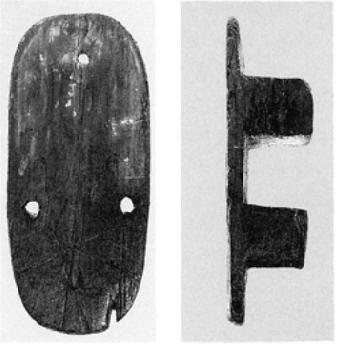
106



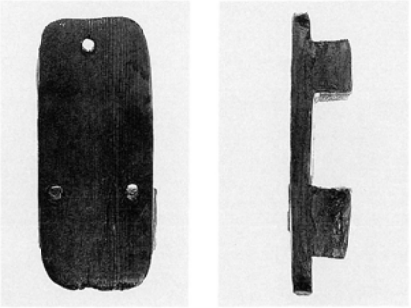
107



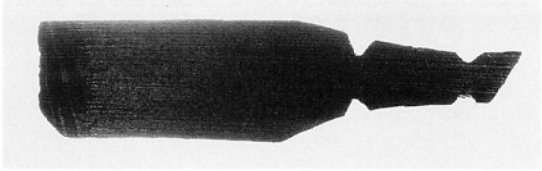
110



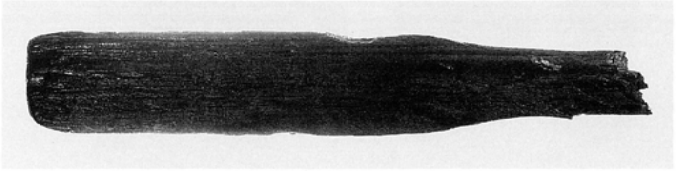
108



105



112



113

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第28集

亀ケ崎城跡第３次発掘調査報告書

1995年３月31日　発行

発行　財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999—31　山形県上山市弁天二丁目15番１号
電話　0236—72—5301

印刷　株式会社 大　風　印　刷